

# The Kansai University Bulletin

Osaka, July 15th, 1924—No. 21

## 報學山里千

行發日五十月七

號一十二第

年三十正大



園學山里千の夏

阪大

堀佐土話電  
番〇七五五・九四〇一

局報學學大西關

座口金貯替振  
番五七八二一阪大

千里山學報 第二十一號

目次

挿繪—夏の千里山(表紙)—第三十三回「學の實化」講演會記念攝影—千里山學報創刊二周年記念晚餐會出席者—文藝運動—野村吉藏氏と木下孫一氏の近照—英語會の岩崎部長歡迎會記念攝影—三笠山に於ける學部第三學年學生—關西大學乘馬會會員と同會教官德永中尉—尼崎圖書館に於ける琴浦會文化講演會記念攝影—新に勅選議員に任ぜられた本學理事佐竹三吾博士—文學科開講記念文藝講演會記念攝影

大學に於ける暑中休暇の意義

關西大學專務理事 宮島綱男  
交換論序說 關西大學講師 沖中恒幸  
コセンチニ教授訪問記(二) 關西大學教授 岩崎卯一

學内報—文部大臣よりの最近認可事項—教員編任—第二十四回「學の實化」講演會—野村・木下兩氏の昇進—野村・木下兩氏昇進祝賀會—千里山學報創刊二周年記念晚餐會—社會科學研究會第十一回例會—第二商業學校職員會議—第二回夏期語學講習會開催—學部並に大學豫科第一學期授業終了—專門部第一學期授業終了—第二商業學校第一學期授業終了—服部教授の學外講演—小泉教授の學外講演—坪内講師の學外講演—宮島專務理事轉居—田邊講師の洋畫夏期講習會講師受囑

校友の面影—野村吉藏氏—木下孫一氏  
本學擴張基金附申込者芳名  
校友叢報—學生叢報—雜錄

大學に於ける暑中休暇の意義

關西大學專務理事 宮島綱男

既に一昨年の七月、第一學期の終了式を行つた際にも一言したところであるが(本誌第三號第五頁参照)、大學の暑中休暇が比較的長期間に亙る云ふことは、決して、徒らに學生をして遊ばしめるためでもなく、又暑さのためには研究が不可能であるから休む云ふ意味でもない。日本の暑さ位には、容易に堪へ得るだけの體力を吾人は持合せてゐなければならぬ。元來日本は凡ゆる意味に於て貧國であるから、各種の資本若くは資本財の代りに、切めて暑さに堪へ得る位の肉體的資本がなくはならぬと思ふ。然るに近來我同胞が一般に柔弱に流れて、西洋人の眞似をして、避暑なきに貴重な時を徒費しやうとするのは、餘り感心した傾向ではないと思ふ。

私の見るところは、暑中休暇の期間の長いには二つの意味がある。即ち第一義は、教授にライブラリー、ラボレトリー、その他實際との接觸に於て、自由に研究材料を得るの時間を提供する云ふことであり、第二義は學生をして教場での研究を實際に試みしめ、或は教授の指導なしに、自力を以てこれ亦自由に研究する餘裕を與へるために外ならぬと思ふ。殊に「學の實化」をモットーとする本學學生諸君は、上述第二義に従ひ、この休暇期間を意義あるものとして費して欲しいものである。

元來日頃の研究は、さうしても注入的、受動的に流れて、自發的研究が少く、常に教授の

講義に引きずられて行く云ふ傾がありがちである。従つて、切めて休暇中だけでも、自發的に、獨力で研究をなす機會であることが望ましい。その具體的方法は勿論多々あるであらうが、ここに参考までに、思ひついた二三研究のメソドロジーを紹介したいと思ふ。先づこの種の研究の要領を一言で蔽へば、その題目なり對象なりが何でもあれ、兎に角何かましまつた研究を爲す云ふことである。

例へば何か一冊の書物を選んで、これを讀み終る云ふが如きはその一方法である。學部及び專門部の學生諸君は、各その專門の研究をしてゐるのであり、又豫科の學生諸君は、近く專門の研究に入らんとしてゐるのであるから、その各専門に屬する纏つた和洋の——

何れでもよい——の書物を選んで讀むのも固より結構である。然し又、専門外の書物を殊更に選んで讀んで見るのも、自己専門の書物を讀むのに比して、その効果は決して劣るものでない云ふことを特に言ひたい。何故か云ふと、法、經、商等に屬する學生が、その専門以外の精神科學、例へば哲學、文學等の書物を讀む云ふことは、自己の有する専門の研究をして、一層完全ならしむる所以である云確信するからである。

一體法、經、商の學を専門とする學生が、文學を蔑視し、これに反感をさへ抱く云ふやうな例も少くない。同時に文學、哲學等を研究する學生が、法、經、商等の學問に對して、

やはりヴァイス・ヴァースでありがちである。これ等は共に大變な間違であつて、先づ圓滿な人間であることを前提とし、その人間が専門の學問を修めてこそ、その人に専門家としての尊さが生ずるのである。

又他の例を引かんか、學生の家庭としては、農家あり、商家あり、官吏あり、種種様様であることは勿論であるが、大學統計の上から見て、學生の大多數は農家の子弟である。従つて學生の多數は、田舎から都に笈を負ふてゐるものである。先づ第一に奨めたいのは、これ等の學生諸君が、切めて休暇位は父母の膝下に歸つて暮す云ふことである。

父母の膝下に歸る云ふことは、家庭の愛を味ふさか、父母に孝養を盡すさか、乃至所謂故郷忘じ難しの感情を満足せしめる等、精神上の意味のあることも勿論であるが、私はここに、學生諸君にまつて、歸郷云ふことは、もつと密接な關係がある云ふことを特筆したいと思ふ。即ちこの歸郷云ふことは、學生がその研究に資する云ふ點に於て、將た又もつと利用厚生の關係に於て、一層多くの意義あるものであることを記憶する必要がある。具體的に言へば、農村出身の學生諸君は、その郷土に歸つて近頃喧しい農村問題の研究、例へばその地方の米價の問題、小作の問題、農村金融の問題、自作農の問題、副業の問題、農村教育の問題等、自己に利害關係の最も深いことで、而も立派な研究論題になることが少くない。これ等の問題を捉へて、

長い休暇中に纏まつた調査をすれば、學問研究のメソドロジーが、自ら充分に解釋出來、更に財産的に、又家族的に唇齒輔車の關係を

# 研究

## 交換論序説

關西大學講師 沖中恒幸

(一)

有する自己出身村の。カー・カラーが充分に諒知せられるであらう。或は又、村人を相手に、村の話を聞いたり、都の話を聞かせたり、總て郷黨を善導する云ふ心持を以つて接すれば、自己の精神修養に資するところ特に大なるものがある。田舎から都に出てゐる學生が田舎に歸つて、昔の小學校友達など一而もその友達は小學校では自分より成績も良く、總ての點に於て優者であつたが、事情のために學を進め得ない云ふやうな友達——遺憾ながら世間に少くない。勿論大體に於て、田舎にのみゐる人は、都會に學ぶ諸君に比して、知識なり趣味なりの程度が低いことは事實であらう。然し、それは已むを得ぬことである。これを理由として、それ等の人人を低級視し、蔑視するに於ては、かくの如き者は、如何に高等の學問を修得したところで、社會に立つて多くの人人を率ゐ、多くの人人を相手に氣の利いた事業を爲すことは出来ぬ筈である。約言すれば、かくの如き學生は、天下孤立孤獨であつて、社會的生活の資格の無いものと言つても、暴言でないと思つて、以上は農家の子弟に就て述べたのであるが、その他職業を異にする家庭の子弟に於ても、略同様の研究調査、略同様の精神修養は出来る筈である。

これを要するに、長い休暇を學生として最も有意義に、且つ研究上、將た又人格陶冶上最も近い關係のある事を實行することに費して貰ひたい。避暑に行くとか、遊説に廻るとか云ふことは、學生生活に深い關係がないではないが、右に述べたところのものに比すれば、第二位に置かるべきものと思つて、事物の本末を誤まらぬやう心懸けられんことを望んで已まぬものである。

(未完)

交換と言ふ一つの社會經濟的現象が從來經濟學の上に如何なる地位を占めて來たのであるか。學者が經濟學理論を構成するに當つて常に悩んで來た重要な問題の一つは、常に變動して靜止しない所且つ摺み所の極めて曖昧な社會現象の裡から、何うして量的計量の可能な且つ一切經濟現象の根柢を貫く所の法則を樹てやうかと言ふ事であつた。甫社會現象なるものは最後主觀を其構成要素として居るが故に常に一般特殊との關係に於て複雑な解き難き問題を殘して居るのみならず、少くも吾々の經驗に上つて來た社會の色彩や傾向やに於て時々場所との相異するに従つて表面的又は根本的不同をのみ示せるものと思はれる。此の社會傾向の裡から經濟學の倚つて立つ事の出来る所の獨立不變の法則を拾ひ上げやうとするは決して容易な業では無かつたのである。ケネーやスミスは形而上學的自然法則の前に立つて此を富の生産の裡に探し求めて失敗を殘した。メンガーやクラークは主觀的觀察の方法に依つて消費傾向の裡に動かぬものを見出さうと努めたのである。ロッシヤーからクニース、シュモラーに至る迄は此等不變的法則の握捉に斷念して不靜なる流轉其物の認識を以て學の内容としたのであるが、今經濟學の巨人マーシャルに至つて交換現象

の裡に此概念を法則を見出したのである。彼の學を以て價格經濟と稱する所以である。然し交換を以て基礎概念の依て立つ所としたのは決して彼一人に止まるのでは無く全く異つた意味に於てではあるが獨逸の所謂經濟階段發展説を採るヒルデブランドとミューヒャウも亦交換の裡に動かぬ基礎を獲やうとしたのである。勿論彼等は交換の形式的變化の裡に人類の經濟的進化を發見したのであるが、交換そのものを基礎概念としたものを見得るであらうと思はれる。前者に於ける自然、貨幣、信用の諸經濟的分類は交換形式の發展に表はれた人類の *Ideengang* を示すものであるが故に他の一切社會狀態を制約し得るものと考えた。後者の家内、都市、國民諸經濟的分類は生産から消費に至る距離の長さに依るものである以上之も亦交換現象の基礎から經濟社會を凝視したものであつた。ペーム・パウエルクの迂迴的生產の説も亦交換を基礎としてのみ可能である。

然し此等にも増して交換概念の上に純經濟法則を造り上げやうとした極端は之れを純粹理論家シュンペーターの經濟學に見出すのである。彼の計講する所は彼の言ふ(實は彼の選び採つた)經濟現象を數學的公式に還元しやうとするのであるから多様な社會現象の裡から一切の基礎を考へ得られ且つ不變に量的表現の可能な經濟現象だけを選び別ける必要がある。此立場の要求に従つて先づ政治的、倫理的並に哲學的要素の種種を經濟的考察の範疇から取除けて純粹に經濟的要素を抽象しやうとした。彼は此の目的に到達するが爲めに『人類は常に一定量の物に對立す。』と言ふ所から出發して行つた。かうして國民經濟學なるものは社會經濟を全體として扱ふものでも無く、欲望満足と言ふ主觀的心理現象を扱ふものでも無く、更に經濟法則の發見又は財の分配、生産、消費でも無く『與へられたる經濟狀態に於ける依存關係又は機能關係に就ての純粹理論を説明するに過ぎない』(Abhängigkeits verhältnisse oder Funktionalbeziehung)。而かも此依存關係は物の量の對立或は連結の裡に置かれねばならぬ。即ち一つの與へられたる量に他の一つの與へられたる量が所屬する様な連結に立つのである。言ひ換ふれば同量的對立狀態である(Gleichgewichtszustand)。かうして彼は一切經濟現象は交換關係から出發するものとするに至つた。而して交換關係を主司する所のもは原價又は勞働の量ではなくして價値の原理である。而かも此價値の原理をウインの學者の夫のやうに心理學的に説明しやうとはしないで道德的考察は全部外にして所有貨物の量のみを純粹に此を見やうとした。彼によつて經濟學の内容は結局交換の物價問題にのみ限られ而も其裡でも需要の曲線研究に限らるゝとした。即ち『固き價値量』を求めたのである。このやうにして得た彼の純粹科學としての經濟學は交換關係のみを取り上げて此を量的に説明しやうとしたのである。

交換現象なるものが一切社會現象の根柢を握るものであると言ふ理由により、或は夫が人類の理想發展の形式を示すものであるが故に、或は夫が社會の甚しい特殊的にも不拘吾吾に不變の固き價値量を示し得る唯一の概念であるとする理由に依り、夫夫には異なり

らも重要な地位を從來學の裡に占めて來たのである。

(一)

甫ミ交換が何う言ふ社會的過程として生れて來たかに就ては他の多くの經濟問題と共に異論が多いのであるが須く通説に従つて置くならば、原始社會一家族生産の餘剩物を賜與の形式に於て又は接待の名に於て、或時は掠奪に依つて相互に交換し合つたものの如くである。言ふ迄も無く其目的とする所は獨立的自給經濟の缺點を補ふ事にあつたと思はれる。

近隣ミの交換が漸次社會的習慣に發展し、更に進んで都市的市場の發生並に之が發達するに至つて交換の量ミ數ミは益増加するのみならず、人間生活の裡に常習的行爲としての地位を高めて來たのである。交換なる現象の乘つて來る所の此二種の傾向は其機關としての都市の平和、安定、確實、便宜等の進められると共に愈其速度ミ力の及ぶ領域ミに於て重要さを附加して來た。けれ共經濟的發展の初期の一般として生産の目的は直接的に消費であつて、行はれる所の交換なるものは尙く尙餘剩物の取扱方の一方便であると言ふ事即ち交換なる現象は人類經濟行爲中常に第二義的地位を占め得たに過ぎなかつたと言ふ關係は、可なり久しい間續けられた事と思はれる。交換が此様な第二義的地位から引上げられて第一義的になつたと言ふ事は其結果として並に夫の平行現象として多くの新しい且つ意義深い問題を社會に惹起した事は勿論である。直接消費を目的とする生産から偶餘剩の發生した物を持ち出し偶不足の物を此の代りに得る所の關係から、直接的には交換其物

を目的とする社會に入り來るのには其間可なり長期に渡つて複雑な發展を経由した上で、人類が相互に意識せず又明示せずして自分以外の社會の行爲に絶對的の信任を置き得る様になる事が必要である。即ち交換なる社會現象が何等新しい事では無く疑ふ可き事件でも無く輕侮される可き仕事でも無く、換言すれば一般社會的習慣として當然の現象に迄進展する事を必要とする。此所迄來て初めて彼は自ら帽子を用うる否に拘らず、又其趣向の如何に關せず多量の帽子を生産し得る事になり得たのである。此程度に於て交換は生産の直接的目的となり得たのである。

更に此傾向が進むに於て交換が消費をも左右する所の力を所有するに至つた。此以前の時期に於て交換の量ミ傾向ミを支配する所は生産ミ消費ミの量ミ傾向であつたが、現代に於ては反つて交換が此等を決定する力に於て優る傾向を示して來たのである。新しい商品の輸入が其品物並に其關連した品物、夫と同様の氛圍氣中にある品物の生産ミ消費ミを増加せしめるが如き、或は廣告の力なるものは消費の創造生産の増加を交換に依つて得やうとする方法の重要な一つである。更に重要な一つの傾向は發明並に企業組織の改良と言ふ點である。此等は多くの場合に於て原價の引下げによつて市價を低くする効果を持つものであるが此市價の低いと言ふ交換的現象は多くの場合消費の創造又は増加、従つて生産の創造又は増加を來すものである。(勿論豫め生産されざる物並に最後消費されざる物を交換する事はあり得ない。然し夫は決して交換が生産ミ消費ミを支配すると言ふ事を妨げない。

(二)

麥稈帽子が一個五拾圓で交換される場合其消費ミ生産ミの量なり傾向なりが現存の夫ミは餘程相異したものになると言ふ意味に於てか言ふ事が出来る。かうして交換なる現象は社會經濟の中心となつた。然し之が中心的經濟現象であると言ふ意味は、上述の通り生産消費ミの支配關係又は影響力の故にのみ言ふのでは無しに、更に重要に殆ん全部社會の個人的經濟目的が常に必ず此交換關係を通過しなければならぬ點に於て事實である。一切個人の經濟行爲なるものは經濟的餘剩價値の利得を目的とする。生産者は後述するが如くに生産者餘剩價値を通じて最後の消費者餘剩價値を、消費者は直接に消費者餘剩價値を獲る事にある。此等餘剩價値なるものは然し必ず價格に依つて現化される。即ち交換機能を通じて初めて具體的な問題として人生に觸れて來るのである。

(三)

以上のやうに考へて交換と言ふ現象而して其中心概念である價格なるものが吾吾社會生活の裡に非常に重要な役目を探つて居る事は疑の無いものとして、さて此價格は如何にして決定されるかと言ふ困難な問題が起つて來る私の蔽つて居る麥稈帽子が何故七拾錢で無ければならぬか。夫が何故貳圓五拾錢、參圓貳拾錢で無いのであらうか。然し此困難は今述べつつある所の序説の觸れる所では無しに、夫は本論の問題である。其所で序説として残された重要問題の裡で、消費、生産、分配の現象ミ價格が如何に關係し合ふかと言ふ事、換言すれば價格が消費者としての吾吾に對して或は生産者としての吾吾に對して何んな役目を爲しつつかあるか。更らに分配の上に向う言ふ力を持つものであるかに就いて其概略を考へて見るのである。

消費者の目的は消費に依つて何等かの消費者餘剩價値を得やうとする所にある。彼が消費ミ言ふ行爲を起すに先立つて豫め價値判斷に基く所の種種なる會計を意識的又は習慣的無意識的に行はねばならぬ。即ち吾吾は今消費の對象物ミ成る可く決定を待つ所の物Aに對して何かの價値を發見する。然し其物は交換ミ言ふ一つの機能を経由して購ひ得るものなる以上は此Aを得るに對して何かの代償物の引渡しを要求される。要求される所の代償物は常に必ずAと同様の高さを保ち得たものである事を必要とする。即ち同量的對立を形成し得る何物かBである事を要する。何故ならばAの方がBよりも高い場合A所有者は之を手離さないと同様にBの方が、より高い時にはBの所有者は此を手離さないが故である。けれ共此場合に『Aの高さ』、『Bの高さ』なる二つの高さを判斷に於て其判斷決定者は常に相異なる二つの主體である事を忘れてはならぬ。若し此が同一人の判斷であり、而して尙二物共に同一の高さを價値を判斷されたものであるならば交換の行はれ得る餘地は生じない。そこでAの高さ、Bの高さ、Cが同一でなければならぬと言ふ事言ふ前にも二様の異つた價値判斷が存在しなければならぬと言ふ一見矛盾せる二つの間は矛盾なくして行はれるのである。何故ならば前者は量的社會的或は客觀的の對立關係であるが後者は心理的個人的又は主觀的價値判斷關係であるからである。而して此所に自分の強く主張して



置きたい一點は「此等矛盾せるが如くにして然らざる此等二様の關係が存在して初めて現代的な意味に於ける交換が可能である」と言ふ事である。上例を稍現實に近い例示に代えて此を説明する。

物Gに對する價值判斷に於て貨幣Mの所有者aに此Gを購はむと欲するMの所有者bとの間に各各相異のある事が交換に先立つ所の必要條件である。或はGに對する價值判斷が同一である場合Mに對する價值判斷に於てaとb間に上下のある事を必要とする。此等いづれかの落差が生じなければ水は流れない。然し一定量のGに對して與へられるMの量は(一定の時)一定の場所(に於て)確立された割合であつてaのG又はMの主觀判斷に直接動かされる事がなく、aの代りにc、dなる他の相手方に置き換えて見ても此量の割合は變じない。と同時にその一定量のGの支配し得る他の物Gの量(確定されたMの量の支配し得るGの量)は常に同一でなければならぬ。換言すれば與へられたるGとMとは同一量のGを支配し得ると言ふ意味に於て同量的對立關係に立てるものと言ふ事が出来る。即ち當事者の主觀的價值判斷からすれば交換の起るに先立つてGとMとは種々なる形に於て相異のある事を必要とし、交換機能の上に表はれた量的關係に於てはGとMとは同一の高さ又は、力に依つて連結され得る均等の關係にある事を必要とする。

(四)

この様な關係の下に消費者が客觀的交換機能を利用して主觀的價值判斷の餘剰を得る徑路は簡單である。消費者が直接的に彼の主觀か

ら無關係に立てられた市場の比率即ち彼の得むと欲するGの一定量は彼の要求されるMの一定量と對立すると言ふ客觀的公式  $AG = CM$  に立ち向ふ。此比率は  $AG = BG, BG = CM, AG = CM$  なる意味に於て均等される。然し此比率に於て直ちに彼消費者は交換關係に入り込むので無しに彼は此G並にMに對して主觀的判斷を試みて  $AG > CM$  と言ふ不均等なる結論に到達する事を必要とする。此不均等は彼の價值判斷に於てGの上昇Mの下降又は兩方の變動に依つて起るものであると共に更にA又はCなる一定量の量の變動に依つても起る。即ちAが一〇〇、Cが五〇〇 ( $100G = 500M$ )なる關係が一五〇對五〇〇 ( $50G = 500M$ )なる事がある。即ちGの下落である。夫と反對に八〇對五〇〇 ( $80G = 500M$ ) 即ちGの騰貴なる事がある。即ち第一の場合は一Gは五Mであり、第二の場合一Gは三・三三三Mであり、第三は一Gは六・二五Mの割合となつた。此等色の割合が消費價值判斷に於て  $AG > CM$  を出現し得た時にのみ彼は消費行為に移る。假に彼の判斷に於て一Gは四Mなりと言ふ式を得た時、第二の場合に於てのみ彼は交換に入つて餘剰の幾分を得る事となる。餘剰は〇・六六一Mに對する彼の價值判斷と同量であつて、此だけGが上れるに至つて即ち一Gが四Mに至るに於て彼が購入をなす事の意義を失ふ事となる。

以上の様に消費者餘剰價值は消費者の貨幣並に物に對する主觀的價值判斷及び物價なる所の客觀的同量對立關係の間の會計から發生するものであるが、而も此會計の中心點をなすものは物價である。與へられたる状態に於て

は物價高ければ高い程消費者餘剰價值小なり低ければ低い程大なる。此を社會的に見てもGに對する價值判斷が低いかMに對する價值判斷の高い人達をも消費關係に引き入るが故に消費者餘剰價值の社會總量は益増大するものさされねばならぬ。

生産なる經濟現象も亦消費と共に餘剰價值の獲得を以て最後の目的とするのであるが、此關係は上述の場合よりも遙かに複雑であり説明が困難である。従つて此を概説する事は餘りに多くの誤解を來す危険があるが故に、以下述べやうとする所は非常に多くの前提を前置し、且つ現實からは可なり遠く引き離れた關係に抽象したものである事。而かも其根柢の骨組を略述しやうと努力したものであるを述べて置く。

生産關係に於て消費關係に於ける場合よりも價格なる交換機能の所有する重要さは甚しく高い。彼が餘剰價值を得る最後の目的に到り着く迄に價格と價格との間の差額即ち餘剰價格を所得しなければならぬ。かくて所得されたる餘剰價格が再び客觀的價值と主觀的價值判斷との合計を通過して生産者の消費者餘剰價值となつて表はれて来る。即ち生産者である彼が最後の點に到達する迄には少くとも二重に價格の支配を経なければならぬ。而かも純生産者としての關係に立つ時に受ける價格の支配は消費者としての生産者の受ける支配よりも遙かに濃厚であるのである。

G

E

A

此線上Gの高さが彼の生産物の賣却され得る價格であり、Eの高さが原價即ち生産費用の高さである。GEの長さ即ち生産物價格と生産原價との差額が即ち生産者

餘剰價格である。已に述べたる如く價格は主觀的價值判斷に對立して常に客觀的同量的對立關係であるをすれば、此餘剰價格の發生に當つて差詰め二對の交換關係が成立する。第一は  $AG = CM$  であり、第二は  $DE = HM$  である。(A、C、D、Hは各各の數を示す)生産者が生産を繼續するには必ず此二對の交換關係に於ける差額を獲やうとする目的を以て居なければならぬ。此量の計算は即ち價格を通じて表現されるが故に  $CM > HM = C > H$  計算されねばならぬ。〇—Eが生産者の獲得する餘剰價值である。以上の様な計算が正しいとすれば餘剰價值に來る順路上純粹に生産者としての會計は三項目共に交換機能なる所の價格を通じて行はれる。即ち總ての段階毎に一度一度交換機能を通じてのみ最後餘剰價值への歩調を進めて行き得るのである。

此計算は然し一切の條件が與へられたものにして、即ち價格なる同量的對立の關係の各項目が社會的客觀的に已に與へられたるものとして考へられて居る。従つて生産者は已に與へられたる數字を單に計算する事のみを其仕事とする解であるが、事實は決してそうでは無い。彼は出來得る限りGEの長さを大きくし、並に縮小されざらむ事を努力しなければならぬ。此事はGの高さを押し上げるか、Eの高さを引下げるかの、いづれか又は兩方に依つてなされる。一は生産物價格の引上げであり、二は費用價格の引下げである。此等が如何に可能であるかは此等價格が如何にして決定されるかと言ふ問題に移るが故に此所には論じ得ないが、唯此所に注意して置かねばならぬ一

點は生産者餘剰價格が分配を通じてその大部

### 外遊記

#### 「コセンチニ教授訪問記」(二)

(最近イタリー社會學界の狀態)

關西大學教授 岩崎 卯一

分が資本家並に企業家の手に納められた時に彼等は其種の僅かに一部分をのみ消費に當てるに過ぎないと言ふ事である。従つて此種の餘剩價格が最後の消費者餘剩價值となつて表現される部分は消費者餘剩價值に還元されざる部分に比して比較的少率である。彼は此を餘剩價格の儘に之を保存して次の餘剩價格の増収又は社會權力の獲得に當てるが爲めに積立てて置く事が多い。此所に彼等獨特の消費問題としての奢侈消費の興味ある現象が湧いて來るのであるが、此に俱に勞働者階級の消費者餘剩價值と對立して或種の反對傾向を示すものである。即ち勞働者所得の殆んど全部は消費者餘剩價值と全面的に關係するものなるが故に、彼等階級全體として見る時には勢働の引上によるD點の均上げが同時に其程度のB點の均上げを伴つた場合は結局何等所得引上の効果無き事なるが故に勞賃によるGの引上げと同様の強さの意味に於てBの引下げに利益を感じるのであるが、資本家企業家はEを引上げる事から來る消費者餘剩價值の損失は全體として見て僅少の部分であり、彼等獨特の奢侈消費の本質上反つてEの引上げはある方面に於て消費者餘剩價值の増加を來す事さへもあり得るのである。彼等がEの引下げによる所得の増加による利益を欲する事は勿論である。此に依つて見る如く價格なる交換機能の生産者に對する意義は致命的に重要なものを見得るのである。

價格が人類生活に持つ意義は勿論此等に止る事が無い。分配問題恐慌並に恐慌社會一般現代に於ける殆んど一切の經濟問題が此機能を通過しない事は稀である。然し以上の如く其重要さのみを見て經濟學の基礎概念が價格なりや否やを判定するは言ふ迄も無く尙早である。

(未完)

愉快な食事を済ました後、話に油が乗つたコセンチニ教授夫妻と小生とは、再び元の應接間に戻つて、此處でも亦社會學の話に花が咲き甲候。小生は今、コセンチニ教授の不遇な學究としての生涯をヴィコの夫れに比し其の境遇に對して萬腔の同情を寄せ申候も、只重要な一點に於て、ヴィコ教授とは相似ざる事多大なる點あるを發見致候。其は兩者の家庭にて候。前に述べ候通り、ヴィコは、貧乏人の私生兒で、結婚に際して辛ふじて結婚名簿に自分の名前を署名し得たま言ふが如き無學の一少女と結婚したるも、これに反しコセンチニ教授は、瑞西○ザン大學のパレト教授の下で社會學を研究したる良家の淑女と結婚され、従つて其の家庭は春の如き暖かさ、愉快さを示し居候。教授の機關雜誌『輿論』(Vox Populorum)に附加されてゐる附録の佛文は、全部この美しく、賢い夫人の筆になる由聽及び居候。教授の數多き著書の中で佛文で書かれたものの大部分は、この陰れた夫人の内助の功が加はり居るやに傳へられ候。イタリーに於ける最も有力な社會學者として教授の眼に撮する學者の顔振に關する小生の例の如き質問に對して教授は稍や迷惑相に左の如く答へられ申候。

「イタリー社會學の第一人者と言へば無論ヴィコである。彼は今から二世紀前、オーグュスト・コントの時代よりも尙ほ一世紀半前に、實證社會學體系を見事に樹立して居る。彼の名著 Principi d'una Scienza Nuova は非常に難解な文章で書かれてあるので其の明確な意味を確實に把握することは仲容易ではないが、彼は其の中に、文明進歩の三階段(Les trois etages du Progres)——の三階段の法則の發見はコントの主要なるクレヂットの如く普通に誤認されて居るが——を明瞭に記述して居る。法の起源を探求する彼の思索に於ても、社會進歩の跡をたざる彼の研究に於ても、彼は人類智能の發達の三階段神學的——形而上學的——科學的——を其處に明示して居る。其他、原始人類社會に於ける社會統制の起源及機能に就ても、彼は驚く可き科學的正確さを以て、詳細に記述して居る。實にヴィコの文獻研究は、イタリー社會學の學徒にまつてはメッカ禮讚である。

「ミころが、ヴィコの學的業績は何人からも顧られず、世紀は黙黙として進んだ。十九世紀の末葉から二十世紀の初頭にかけて、ハーバード・スペンサー(H. Spencer)の社會學は、先づ佛獨の學界を浸潤したのち、潮の如き勢でイタリーにも侵入して來た。社會有機體説(The Theory of Social organism)は總ての社會科學に影響を及ぼした。而して哲學、法律學、經濟學の學徒は皆この社會有機體説を研究して、これを各自の領域に競つて應用しやうとした。人が若し試みに、千八百九十年代から千九百五年位までにイタリーで出版された社會科學に關する諸著書を調べて見たならば、其處に『社會學』か『社會學的』かと言ふ名詞を著書の表題に附したものの多いのを發見して定めて驚くであらう。其の當時は、一種の流行のやうに著書の内容がさうであらふも兎も角も人眼を惹くために社會學と言ふ字を使つたものである。其程の熱狂にもかかはらず其當時社會學を書いた學者は、今では、社會學の如き學問には全く縁のない人のやうな顔をしてゐる。

「現在に於てイタリーに純然たる社會學者としては、自分獨りだけだ信じて居る、私は初め「ヴィコ社會學」を書いた時から今日まで、徹頭徹尾實證主義的社會學者である。經濟學者でもない、刑法學者でもない、哲學者でもない。法理學を大學で講じこれに關する教科書的著書こそあれ、法理學者を以て自任しない。只純粹の社會學者である。」

「小生の懇望に動かされて、少時默考した後、左の學者の名を擧げられ候、ここに其の人人の姓名と所屬大學と社會學に關する文獻中主要なるもののみを擧げ、詳細なる著書目録は附録として添附致す可候。

一、Arigo (Roberto) 甫め僧侶なりしも後にパドヴァ大學(Univ. di Padova)哲學史の正教授となる。十九世紀の中葉より末葉にかけて、實證主義哲學の最も力強い擁護者として、輝いたる第一人者である、彼の死後、彼の衣鉢を受けたるイタリーの若き學徒が、今日法理學に於て、哲學に於て、實證主義の壘を守つて居る。彼の著述全部は「哲學研究」(Opere filosofiche) 十冊に纏めてある、其中より社會學上に重要著作を引き抜けば左の通りである。

1. La morale die positivisti. 1787 p. 724.

2. Empirismo e scienza. 1882.

3. Sociologia. 1879.

千八百七十九年と言へば、米國では未だ社會學の礎石も置かれぬ頃である。僅に ward が其の動的社會學 (Dynamic Sociology) を考案中で、Giddings や Small や Sumner は未だ白面の一書生であつたのである。佛國の Tarde や Durkheim も未だ社會學に手をつけてない頃である。其時代に社會學の體系を組織して發表したものは、假令、其體系がスペンセリアンの臭味を帯びて居るとしても兎も角も異つするに足る。この「社會學」は「Opere filosofiche」の第四冊に收めてある。

4. L'inconoscibile di H. Spencer e il Positivismo. 1883.

二、De Marinis (Enrico) 一八六三年生、長くナポリ大學 (Univ. di Napoli) の法律學の教授で一八九五年より代議士に撰ばれ、一時は文部大臣候補者にまでなつた人である。社會主義者であつたが、年を経るに従つて右傾し最後には勤王改革主義者となつた。今は故人である。同教授の社會學上の著作は左の本を挙げれば充分であらう。

1. "Sistema di sociologia". Torino. Uniontip., 1901, p. 685.

2. Le presenti tendenze della società e del pensiero e l'avvenire. 1896.

特に「社會學體系」は自然哲學及歴史哲學の全體に亘つて論じた著述で可なり注意

されたものである。

三、Vanni (Cecilio)

一八五五年に生れ、ボローニヤ大學 (Univ. di Bologna) から

ローマ大學に轉じ、法理學正教授として、社會學的法理學を講じて居たが最近に長逝された。ローマ大學法理學正教授として、今、賣出している若い Del Vecchio 教授及びナポリ大學法理學正教授 Bartolomei 教授は新理想主義派ではあるが共にウァンニ教授の弟子である。彼は初め、スペンサーの進化論を批評しつつあつたが、最後に社會學に這入つて仕舞つた人である。社會學に關する著書は左の如し。

1. Il sistema etico-giuridico di H. Spencer. 1893, p. 52.

2. Prime linee di un programma critico di Sociologia. 1898, p. 142.

3. Saggi di filosofia Sociale e giuridica. 1906, p. 562. (2a ediz. 1911)

四、Asturaro (Alfonso) ゼノヴァ大學 (Univ. di Genova) 倫理學正教授であつたが十年許り前に死なれた。イタリー社會學の發達に努力し、後進をよく指導した點に於てアルデコ教授と並稱される人である。哲學及倫理學に關する著述が多いが、純粹社會學に關する文献を挙げれば左の通りである。

1. La Sociologia, i suoi metodi, le sue scoperte. 1890, p. 261 (3a ediz., 1907, p. 356.)

極めて哲學的に社會學の方法論を説述した重要な文献である。

2. Il Materialismo storico e la Sociologia general. 2a ediz. Genova,

1910, p. 308.

唯物史觀の一般社會學との關係を論じた興味多き著述である。

3. La Sociologia e le scienze sociali. 1893, p. 80.

4. Il Concetto della Sociologia. 1899, p. 29.

5. Sociologia politica. 1911, Genova, p. 246.

五、Groppali (Alessandro) 現在はモナナ大學 (Univ. di Modena) 法理學正教授である。一八七四年に生れた比較的若い人であるけれども、社會學に關する文献の数は非常に多く、イタリー社會學者としては何人よりもよく國外に知られて居る。モナナニ教授と同輩であるけれども、コセンチニ教授が國際社會學會の方に精力を消費しつつある間に、グロパリ教授は早くからモナナ大學の講座に落付いて居るので著述も多ければ、著述の内容も極めて研究的である。現在に於て、社會學ではイタリーでの第一人者である。法理學の範圍でも實證主義派の首領と目されて居る。

1. Saggi di Sociologia, Con prefazione di A. Asturaro. Milano, 1899, p. 173.

この本は彼が僅に二十五歳の時の著述である。而かもこの本は一九〇二年には既に佛譯されて居る。

2. La genesi Sociale del fenomeno scientifico, Con prefazione di R. Ardigò. Torino, Bocca, 1899, p. 174.

同く二十五歳の時の著述である。前著

にアストラロ教授の序文、後著に、アルデコ教授の序文を附したる處着目に價する。この本も直ちに佛譯された。

3. "Lezioni di sociologia", Torino, Bocca, 1902, p. 212.

4. "Sociologia e psicologia", Con prefazione di R. Schiattarella.

5. "Elementi di sociologia", 3a ediz. Genova, 1910, p. 383.

6. "La sociologia", Milano, 1909, p. 62.

7. "Sociologia e filosofia del diritto", Piacenza, 1908, p. 201.

9. "I recenti tentativi della Sociologia pura; a proposito delle pubblicazioni del winarsky e del Pareto", Bologna, 1900, p. 52.

10. "La morale Sociale", Livorno, 1915, p. 129.

私の手許で調査したグロパリ教授の主要著述の数は十七種の多きを算する。無論單行本にならない小論文は除外して居るのである。其の十七種の中今抜き出した十種は純粹社會學の諸問題を検討した研究的著述である。其中(五)の社會學綱要、(三)の社會學講義は最も廣く讀まれて居る。數理經濟學者の學說を論評したのが(九)の「純粹社會學の最近の著作」である。法理學と社會學との關係、換言すれば社會法學を鼓吹したのが(七)の「社會學と法理學」である。最近の著作として(十)の「社會道德論」がある。

この外に未だ教授の二十代に試みた研究業績として、一九〇二年に出版した「La teoria del piacere in Platone ed Aristotile», Milano, p. 60. の言々古典

哲學研究論文がある。純粹法理學の著作で各大學法理學教授參考書として用ひられて居るので「法理學」(Filosofia del diritto, Milano, 1906, p. 378.) の本を全然改訂したやうな最近の著述「Istituzioni di Scienza general del diritto, Bergame, 1921, p. 283.」がある。倫理學に就ての本には「Etica, Livorno, 1915, p. 120) がある。

ゴロペリ教授は今年四十九歳の働きでありであるから、これから、尙多くの文献が社會學、法理學、倫理學に提供されるであらう。文體は割合に平易であるから其の點も教授の著書を廣く讀ませるに役立つであらう。

六、<sup>カッタ</sup>Vaccaro (Michaelangelo) 現在ローマ高等法院長であると同時に、ローマ大學(Univ. di Roma) の刑法及刑訴法に法理學の講師である。矢張りアルテコ教授の指導を受けた人で、刑法に於てはフェリー教授がローマ男子共に社會學派に屬する人で、社會學に於ては奥國の故グムブローウィチ教授と親交ありしのみならず、同教授と同じく社會學論説を持つる學者である。

刑法に關する著書にも大概「社會學的研究」を以てしてある。

ヴァカロ氏の著書中社會學の文獻として擧ぐ可きものは左の通りである。

1. "La Lotta per l'assistenza ai suoi effetti nell'umanità: studio," Roma, South, 1886, p. 151. 3a ediz. 1902.

この著述は同氏の代表作である。佛譯、西譯がある。一九二一年世界大戰に勞働者階級對有産階級の對抗戦に鑑み大改訂を加へ、紙數も倍加して出版された。グムブローウィチ教授の「Rassenkampf」と共に社會學史上の重要文獻である。

2. "Le basis del diritto e dello stato," Torino, Bocca, 1893 p. 388.

「法律及國家の基礎」を以て題ではあるが全然社會學の展開である。

3. "Saggi critici di Sociologia e di criminologia," Torino, Bocca, 1903, p. 267.

外に「法理學講義」の「刑法の社會學的的研究」("Genesi e funzione delle leggi penali: ricerche sociologiche," Roma, Bocca, 1889, p. 238) があり數版を重ねて居る。

七、<sup>カッタ</sup>Carli (Filippo) 前に述べたやうに、現在イタリー諸大學中で社會學を以て講座(自由講座ではあるが)を持つてゐるのはパドヴァ大學(Univ. di Padova)の私講師たるこの人丈けである。コセンチニ教授がこの人を指名されたので、この人の著書を調査して見たら純粹社會學の本は殆ど見當らない。政治(其れも理論に非ずして、時評的なもの)經濟(これも原理に非ずして時評的なもの許り)に關する論文は澤山ある。或は私の調査が足りないのかも知れぬ。

次にコセンチニ教授は純粹社會學者に非ざるも、外國に於て、イタリー社會學の特色の如く見なされつつある刑事社會學者の氏名を擧げられ候、イタリーが生んだ偉大なる刑事人

類學の創設者セサレ・ロムブローソー(Ces. Lombroso)の事は後にカラ教授の會見記の時詳述す可く、ここには省略致候。

一、<sup>ガット</sup>Garofalo (Raffaele) ナボリの高等法院長であり、且つフェリー教授に策應して、イタリー刑法界に實證主義、犯本人位主義、社會防衛主義、社會連帶主義等を宣傳普及せしめた第一人者であり、且つ文明各國語に翻譯された「刑事學」(La criminologia)の著者である。彼は周知の事實であらう。最近に、官職を辭し、ナボリの邸宅に悠悠閑日月を送つて居られる。イタリー上院議員であると共にナボリ學士會會長である。著書は前掲「刑事學」以外に夥しいが、代表的なもの二三を擧げるに止めやう。

1. "La criminologia," Torino, Bocca, 1885, p. xxv—561.

2. "La Superstizione Socialista," Torino, Boux e Frassati, p. xiii—280.

フェリー教授が著名なる社會主義者であるに拘らず、ガット教授が「社會主義者の迷信」を著した點は、同教授の人の容易に相容れぬ性格を示して居る。

3. "Idee sociologiche e politiche di Dante, Nietzsche e Tolstoj: Studi," Palermo, Reber, 1907, p. 200.

二、<sup>フェリ</sup>Ferris (Enrico) イタリーローマ大學刑法教授であり、イタリー議會第一の雄辯家であり、イタリー社會黨の首領であり、大著「刑事社會學」("Sociologia criminale)の著者であり、有名な母親孝行者である事は、刑事學に何等の興味も

理解も同情も持たない人でも知つてゐる處である。著述の數の多いこと而かも學究的なる事に於ては、他の科學に於てもフェリー教授に比す可き學者は澤山はあまい。詳しくはローマ市にて同教授に會見したる後記述しよう。著書の主要なるものを擧げた丈けでも、左の通り多し。

1. "Sociologia criminale," Torino, Bocca, 1892, p. 450.

これは初版である、千九百年に四版を出版する場合に大改訂増補を加へて紙數は一千頁の大冊となつて居る。イタリー語の本と同時に、教授は初版を出した年にフランス語で同じ著述を「La Sociologie criminelle," Torino, Bocca, p. 656.」として出版して居られる。フェリー教授の佛語の見事な、これは周知の事實である。青年時、ナポリ市ラッセル市に留學されたためであらう、この本を翻譯しない文明國は殆どない。

2. "L'omicidio nell'antropologia criminelle," Torino, Bocca, 1895, 2 vol.

3. "Difese penali e studi di giurisprudenza," Torino, Bocca, 1899, p. xix—469.

4. "I nuovi Orizzonti del diritto e della procedura penale," 2a ediz., Bologna, Zanichelli, 1884, p. vi—573.

5. "La teoria dell'imputabilità e la negazione del libero arbitrio," Firenze, Barbera, 1878, p. xii—616.



6. "L'omicidio - Suicidio : responsabilità giuridica.," 4a ediz. Torino, Bocca, 1895. p. 300.
  7. "Lezioni di diritto penale.," Roma, Audisio, 1905, p. 368.
  8. "Progetto preliminare di codice penale italiano per i delitti.," Milano, Vallardi, 1921, p. 156.
- 最後の「イタリー刑法典草案」は、フェリー教授を委員長とするイタリー刑法改正委員会の報告書で、フェリー教授の執筆になつたものである。一九二二年の草案であるから文明國の刑法草案中最新なものである。この本は、他日その佛譯及英譯を對照して研究し主要點を紹介したいと思ふ。

- 同教授の著書は其の二十三歳の時發表した『刑法批評』を以て始まり四十五歳の時發表した『婦人の愛』を以て終つて居る。其の死後『文學の社會學』と言ふ遺稿が發表された私が今、手許で取調べた主要著書の数が二十一冊、論文は餘り澤山なので取り除いた。同教授は既に地上の人でない、私は同教授に地上で面會し得る見込は無論ないので同教授の主要著書を全部ここに収録するつもりだ。
1. "Note critiche di diritto penale.," 1891. p. 129.
  2. "La foute criminelle.," Torino, Bocca, 1892, p. 96.
  3. "La Coppia criminale : studio di psicologia morbosa.," Torino, Bocca, 1893. 8. viii—163. (2a ediz. 1897, p. xvi—216.)
  4. "Teoria positiva della Complicità.," 2a ediz. Torino, Bocca, 1894, p. 216.
  5. "Contro il parlamentarismo : saggio di psicologia collettiva.," Milano, Traves, 1895, p. 53.
  6. "La morale individuale e la morale politica : saggio di sociologia.," Roma, case edit. italiana, 1896. p. 71.

7. "La delinquenza settaria : appunti di Sociologia.," Milano, Traves, 1897, p. 278.
- この本は直ちに佛譯された、一九一三年教授の最後の年に、この本は大訂正を加へて『Morale privata e morale politica.』と言ふ題で出版された。教授の社會心理學研究業績中最も注目された著述である。
8. "Mentre il secolo muole : Saggi di psicologia.," Palermo, Sondron, 1899, p. vii—367.
  9. "L'intelligenza della folla.," Torino Bocca, 1903. p. viii—166.
- 「群衆の智識」を社會心理學より論じたるもの(この二つの點に於て、最大の權威の如く思はれてゐる米國の Ross 教授の "Social Psychology.," 1908 年早稲田大學の社會心理學者の著書中)にシテ教授の著書に關して何等記述する處處を不思議である。
10. "Letteratura tragica.," Milano, Traves, 1906, p. 290.
  11. "Idee e problemi d'un positivista.," 2a ediz. Palermo, Sandron, 1907, p. 404.
  12. "La Coppia criminale : psicologia degli amori morbosi.," 3a ediz. Torino, Bocca, p. viii—340.
  13. "Eva moderna.," Milano, Traves, 1910, p. viii—278.
  14. "Pagina nazionaliste.," Milano, Traves, 1910, p. xii—243.
  15. "I delitti della folla, studiati secondo la psicologia, il diritto e la giurisprudenza.," 4a ediz. Torino, Bocca, 1910, p. xi—350.

- 群衆犯罪現象に關する最も獨創的研究でシゲレ教授の名を不朽ならしむるものである。この著述は殆ど各國語に翻譯せられて居る。
16. "Il nazionalismo e i partiti politici.," Milano, Traves, 1911, p. viii—259.
  17. "La Crisi dell'infanzia e la delinquenza dei minorenni.," Firenze, 1911, p. 111.
- 少年犯罪を取扱つた論文である。
18. "Nell'arte e nella Scienza.," Milano, Traves, 1911, p. vii—277.
  19. "Ultime pagine nazionaliste.," Milano, Traves, 1912, p. xx—257.
  20. "La donna e l'amore.," Milano, Traves, 1913, p. 291.
  21. "Letteratura e Sociologia : Saggi postumi. prefazione di G. Castellini.," Milano, Traves, 1914, p. xxiii—296.
- ④ Nice foro (Alfredo) 同教授は、オリア教授もイタリーに於ける有力な社會學者として推賞された人で、其の主要文獻はオリア教授會見記に掲げて置いた。同教授はシゲレ教授と同じく才人の佛のあつた人で、刑事人類學、心理學、社會學、統計學等に相等纏つた文獻を残して居る。特に貧民心理の研究に於ては伊太利に於ける權威である。前に掲げなかつた文獻で貧民研究に關する同教授の著書中主要なるものは『貧民階級の人類學』(Antropologia delle classi povere, Milano, Vallardi, 1910, p. 288)である。同教授には佛文の著書も相當にある。

# 學 內 報

## 文部大臣よりの最近認可事項

本學が文部大臣から認可を得た種種の事項に就ては、その都度本誌を以て報道したところであるが、今その主なるものを一括して挙げるに左の通りである。

- 一、専門部に文學科を増設する件（大正十三年三月十一日附認可）
- 二、學部商學部内に經濟學科を増設する件（同年同月十三日附認可）
- 三、商學部經濟學科卒業者に經濟學士の稱號を許與する件（同上）
- 四、學部に聽講生の制度を設け男女を問はず聽講を許可する件（同上）
- 五、學部卒業者は高等學校高等科法制及經濟の教員無試験檢定の特權を受くる件（同年四月九日附認可）
- 六、關西大學第二商業學校設立の件（同年同月二十五日附認可）
- 七、専門部卒業者に對し高等試験令に據る豫備試験免除の件（同年五月二十一日附認可）
- 八、専門部卒業者を缺員ある場合に限り詮衡の上學部に入學を許可する件（同上）
- 九、學位規程及教授會規程に關する件（同年六月五日附認可）

## 教員 嘱 任

今回新たに左の通り本學教員を嘱任した。

- 大學部 講師 山室 宗文
- 財政及び金融 法學士 井上 正直
- 商業 英語

專門部 講師 飯田 清藏

## 第二十三回「學の實化」講演會

樞密顧問官、男爵九鬼隆一氏の來阪を機として、去る六月十九日午後二時から千里山學舎第九教室で第二十三回「學の實化」講演會を開いた。同日午後一時九鬼男爵は本學教職員一同に迎へられて來學、階上來賓室に入り少憩の後記念の撮影をなし、直ちに會場に入った。會場には本學の學生始め附屬關西甲種商業學校生徒、近效町村の有力者等聽衆既に千に餘つてゐた。山崎大阪府理事官の簡單な紹介の下に演壇にあらはれた男爵は七十何歳の老齡は見えぬ力強い聲で、洗練された語句を以て『國民精神と産業の振興、米國及び歐洲問題について』の題下に約三時間半に亘り、懸河の辯を振ひ、先づマルサスの人口論より説き起し我が國の人口問題、食糧問題と農業政策の關係、歐米諸國の現状と我國民精神の作興とを長き過去の體験に照して或ひは諄諄と説き或ひは大聲叱呼して國民の自覺を促し、ほざばしり出づる言言、句句、これ皆愛國の赤誠に彩られてゐるかの如くに見えた。かくて午後五時半宮島理事の簡單な挨拶によつて非常な緊張裡に閉會したが、男爵の老齡を以てして尙ほ終始變らざる愛國の至誠は聽衆一同に等しく深い感銘を與へたやうであつた。

## 野村・木下兩氏の昇進

去月九日の理事會に於て左の通決議任命した

關西大學幹事長 幹事 野村 吉藏  
關西大學第二商 同 木下 孫一  
學學校主事

## 野村・木下兩氏昇進祝賀會

別項所報今回本學幹事長に就任した野村吉藏氏並に本學第二商業學校主事に就任した木下孫一氏に對し、各その昇進を慶祝せんがため



第二十三回「學の實化」講演會記念攝影  
(中央のクスマ飯をためる九鬼男爵)

の祝賀會が、本學教授岩崎卯一氏外有志數氏の發起の下に、去月十四日午後六時から、市内東區北濱五丁目大阪俱樂部ホールに於て開催せられた。

定刻左記多數の諸氏出席の下に開宴、デザート・コースに入り、岩崎教授は發起人を代表して、挨拶を兼ね、右兩氏の永きに互る本學へ

の功績を頌し、今次の昇進を慶び、更に今後本學が益兩氏に俟つあるべきを述べてその健康を祈り、これに對して兩氏は交立つて答辭を述べ、非常なる盛會を以て午後九時散會した。出席者は左の通りである。

- 野村吉藏、木下孫一、宮島綱男、垂水善太郎、中村鄧次郎、小泉幸治、服部嘉香、岩崎卯一、水谷揆一、松田一、沖中恒幸、武田藏之助、原田鹿太郎、賀來俊一、武内省三、辰巳經世、樋口純、中村良之助、森川太郎、渥美元次郎、戸田省三、岩岸巖、木戸卯之助、田川七郎、宮田榮吉、原田彌吉、田村悅之助、桂忠雄、松崎義盛、山本順應、中村眉山、川浪辰次郎、引野秀春、中村唯一郎、黒川雲登、三島律夫、吉野謙吉。(順位不同)

## 千里山學報創刊二周年 記念晚餐並事務打合せ

恰も本誌創刊以來滿二ク年に相當する去月二十五日午後七時から、特に同誌と深い關係に在る人人に依り、創刊二周年を記念するがため、且つは同誌を中心に一夕の懇談を俱にするため、市内東區瓦町野村ビルディング内中央亭に於て、晚餐會が開催せられた。

定刻左記諸氏出席の下に開宴、デザート・コースに入つて、宮島專務理事の挨拶、辰巳學報局主任の報告、山岡總理事及び柿崎專務理事の所感等が述べられ、後同誌の發展策につき各自所見を交換して、和氣瀟瀟裡に散會した。出席者——山岡總理事、柿崎專務理事、宮島專務理事、白川理事、垂水理事、木下幹事、岩崎教授、服部教授、辰巳學報局主任、木戸秘書、田川秘書、中村良之助氏、森川太郎氏、歌橋千秋氏。

### 社會科學研究會第十一回例會

本學社會科學研究會例會は、去月三十日午後二時から本學千里山學舎教授室に於て開催せられた。出席者は左記諸氏で、當日の講演者樋口純講師は、『エッチ・ジー・ウエルのモダーン・ユートピア』に述べられたる人種問題なる題下に、約一時間に亘り、同書中に述べられてゐる人種的或は階級的差別觀念に對する著者の見解を紹介し、三時半散會した。

出席者——岩崎教授、早川講師、辰巳講師、中村教授、山村講師、小泉教授、櫻井教授、樋口講師。

### 第二商業學校職員會議

本學附屬第二商業學校では六月三十日午後二時から第一回の職員會議を福島學舎會議室に於いて開き、木下主事、木戸、中村、田川、戸田、室石、中村(唯)、宮田、岩岸、森川の各教諭出席の上かねて懸案であつた同校内規(職員服務規定、學科採點規定)を略原案通り可決し、學友會の組織及び規則に就いて更に協議を重ねたが、その結果學友會學藝部長には戸田教諭、體育部長には宮田生徒監それぞれ當ることとなり各部幹事は教諭數氏に各決定、午後四時過ぎ散會した。

### 第二回夏期語學講習會開催

前號豫報の通り、第二回關西大學夏期語學講習會なる名稱の下に、今夏期休暇中も亦夏期語學講習會を開催することとし、去月二十日午後二時から本學語學教員會を開いて打合せを了し左記要綱に依り、愈本月二十一日を以て開會することに決定した。

一、聽講者 男女を問はず入會を許し、女子聽講者のために特別席を設け、且つその數多きときは別に女子部を置く。

二、組織 英語、佛語、獨語の三科を置き、更に英語科は初等、中等、高等の三科に、佛語及び獨語科は初等及び高等の二科に分ち各その程度に應じて教授する。

三、會期及び授業時間 會期は本月二十一日から八月十二日までとし、毎日晝夜二回に分つて、各科とも晝間部は午前七時半から同九時半まで、夜間部は午後六時から同八時までとする。但し獨語科に限り夜間部のみとし晝間部を設けない。

四、會場 本學福島學舎内

五、講師 本學教授講師中左記諸氏が各擔任する筈である。

英語科——岩崎卯一教授、服部嘉香教授、村上喜貞教授、松田一講師、櫻井匠教授、佐佐穆講師、水谷揆一教授。

佛語科——徳尾俊郎講師、賀來俊一講師、山村喬講師、三田直吉講師、宮島綱男教授。

獨語科——大立自重虎講師、武内省三講師、中村邵次郎教授。

### 學部並に大學豫科 第一學期授業終了

本學學部各科各學年並に大學豫科各學年共本月五日を以て第一學期授業を終了した。尚ほ大學豫科は引續き學期試験を施行する筈。

### 專門部第一學期授業終了

本學專門部並に同豫科各科各學年共本月五日を以て第一學期の授業を終了した。尚ほ專門部豫科は引續き學期試験を施行する筈。

### 本學第二商業學校第一學期授業終了

本學第二商業學校は各學級共本月五日を以て第一學期の授業を終了した。尚ほ引續き學期試験を施行する筈である。

### 服部教授の學外講演

本學教授服部嘉香氏は去る六月十日堂島ビルディング清交社クラブに於いて、同社第四十四回常例中餐會に招かれ『時代を豫言する文學』なる題下に一場の講演を試みた。

### 小泉教授の學外講演

本學教授小泉幸治氏は、去月二十日午後七時



者席出會餐晚念記年周二刊創報學山里千

半から西野田圖書館に於て、同館創立三周年記念のために開催せられた郷土講演會に出講『西野田に於ける證如上人の史績及び或神社の由來に就て』なる題下に、約一時間半に亘る講演を試みた。

### 坪内講師の學外講演

本學講師坪内士行氏は、西野田圖書館の聘に應じ、創立三周年記念のため、去月二十一日午後七時半から同館に於て開催せられた婦人講演會に出講『家庭ミ劇』なる題下に約一時間半に亘る講演を試みた。

### 宮島專務理事轉居

本學專務理事宮島綱男氏は今回左記の場所に轉居した。

### 大阪市南區堂ヶ芝町一九番地

### 田邊講師の洋書夏講習會講師受囑

本學講師田邊信太郎氏は、來る八月一日から市内信濃橋洋書研究所に於て同所主催、週刊朝日後援の下に開催せられる洋書夏季講習會の講師を依囑せられた。

### 夏期學外講演並に自由講座

前號豫報本學夏期學外講演は本誌第二十四頁所報の題目の下に、各専門を有する本學教授講師諸氏がそれぞれ出講することに決定したが、既に中國、四國の各地から申込あり本誌締切頃服部教授、小泉教授その他數氏が既に四國方面に向つて出發した。尚ほ本月下旬市内朝日新聞社樓上に於て、數日間に亘り夏期自由講座を開催する筈である。





# 校友の面影

▲本學幹事・同第 木下孫一氏  
 二商業學校主事  
 (明治四十四年法律學科出身)

氏は人も知る因州鳥取の産、幼にして笈を大阪に負ひ、本學卒業後は學校當局の希望で大學に止り、學務に執掌する傍ら高等研究科に籍を置いて一層の研鑽を積んだ。爾來學識の進むに従ひ氏の本學内に於ける地位も漸次重要を加へ、大正六年一月には副幹事に、大正十年一月には幹事に進み、時恰も本學昇格前後の内外多事なる時機に際し、よく難局に當つて行く道を誤らず本學今日の隆昌に力を致した氏の努力は、後進の以て尊敬、欽慕するまゝであらねばならぬ。殊に今春本學が附屬第二商業學校を設立するに關して氏の拂つた犠牲は誠に筆紙に盡し難きものあり、今回氏がその生みの子とも云ふべき第二商業に主事として就任したのは、期せずして酬はれた氏の努力の結晶であり、又過去數年間、關西甲種商業學校教諭として、將た本學講師として、教授の實際に經驗ある氏には、實にその所を得た地位と云ふべきである。試みに氏が所懐の一端を覗へば、

大いなる誤りであつて、中等教育固有の目的は他に獨立して存するものではあるまいか。大體我國では、——獨り中等教育に於いてのみではなく高等專門教育に於いてもさうであるが——學問と實際との間に距離があり過ぎるやうに感ぜられる。私は法律を主として研究してゐるが、法律に於いても學校の講義と實際とは殆ど無關係な場合が多く、教師は書物の講義はするが實際のことは知らず、學生も強いて知らうとしない。かうした弊は國民の中堅として實際社會に活動すべき人物を養ふ中等教育に關聯して特に考ふべきで、前述上級學校

著、正式書翰作法、最新書翰文要義、最新書翰文作法及文範は何れも好評噴噴たるものあり、近く憲法に關する研究を纏めた、日本憲法要論を巖松堂から出版するさうであるが亦吾等の期待に背かないものであらうことを信ずる。年漸く三十六、氏の將來や誠に刮目して俟つべきものがあらう。



野村 吉藏 氏(上) 木下孫一氏(下) 近照

▲本學幹事長 野村吉藏氏  
 (明治三十九年法律學科出身)

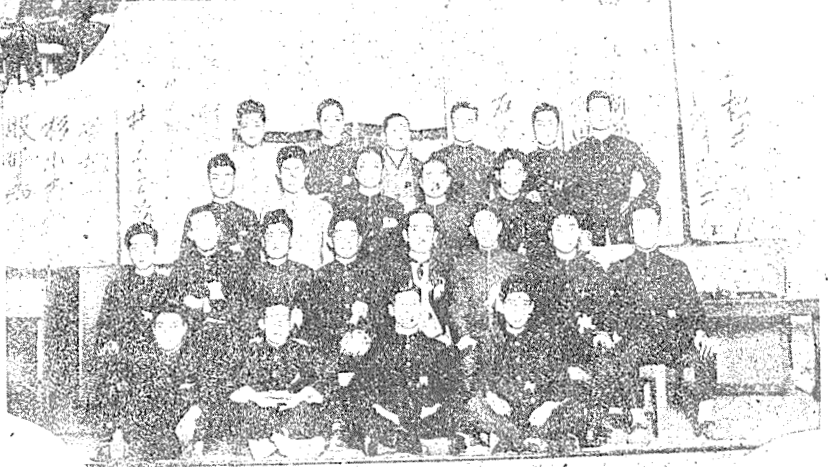
入學の準備教育たる觀ある我國現在の中等教育の状態を思ふと、よく日本人全體としての平均學力が西洋人のそれに劣る言はれるのも、一面には尤もな理由があるさへ考へられる。殊に實際を生命とする實業教育について然りであつて、將來はこの方面に一層の考慮を拂ひたいと思ふ。

大學の使命が眞理の討究にあり、人類文化の向上に資するにあることは固より論のないところである。而もこれらの目的を達するためには、勝れたる天才に充分研學の機會を與へ廣く内外古今の圖書を蒐集し、施設完つたき研究所を設備する等物質的手段の必要缺くべからざるを思ふの時、吾人は經濟的基礎の強弱が亦大學の使命遂行を制する一の重大なるファクターであることを思はざるを得ぬ。然るにこの經濟的基礎を取扱ふ會計事務たるや無味にして煩鎖、加ふるに事金錢に關するを以つて、その間種種の誘惑陷阱の存するこ

決して少しせぬ。この意味に於いて本學一切の會計を主宰して二十年、その間些の過失もなく尚ほ孜孜として止まぬ幹事長野村吉藏氏を有する本學は亦幸福なるかな。今更紹介すべく餘りに多く本學關係者に知られたる氏の名をここに新しく録する所以のものは實にここに存するのである。氏は岡山縣の人、卒業後望まれて學校に止り、副幹事、幹事と進む一面常に大學の會計事務を管掌し、利に迷はず、名を求めず、宛然古聖人の面影を存して終始一貫、本學の財政的基礎の培養に努め、以て本學が今日の大を爲すに至つた陰然の勢力を作つた。従つて氏が學の内外の事情に通ぜることは驚くばかりで、一度母校を去つた學生も常に氏の許へは消息を斷たないのである。春秋二回校友會大阪支部の總會に舊友一堂に會して懷舊談に花咲く時なき、今は法曹界に時めいてゐる往時の苦學生某が、『よく月謝を滞納しては野村先生に呼出されて……』と述懐することもあるこのこと、而もかくて尚ほ慕はれ欽仰されるところに氏の人格が如實にあらはされてゐるのであるまいか。氏は何事についても多くを語らないが、『國語の勢力と云ふものはその國の勢力の消長に伴ふものである。今我國に於いて外國語の研究が盛んで諸外國人の我が國語を研究するもの少いのには、要するに我國の勢力が未だ世界各國の上に及んでゐないこの證據である。我國にして世界に冠絶せる文化を有し世界に潤歩し得る勢力を備へてゐるならば他國人はその冠絶せる文化を研究し、その世界の勢力を迎へんがために、競つて我國の國語を研究するに至るであらう。この意味に於



(上)——國際聯盟協會本學學生支部發會式記念攝影  
 (右)——千里山學會に於ける本學學生洋畫展覽會



(上)——嘉豫同窓會主催學生雄辯大會記念攝影  
 (右)——福島學友會辯論部主催學內雄辯大會記念攝影

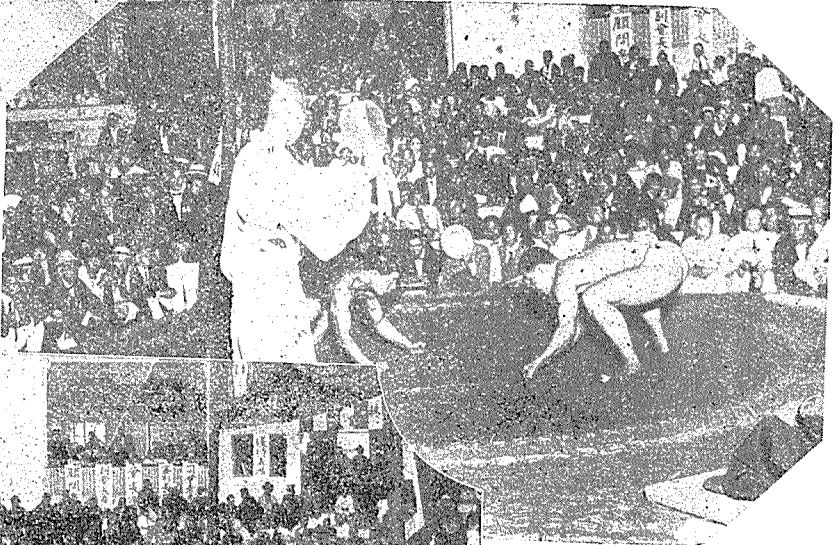
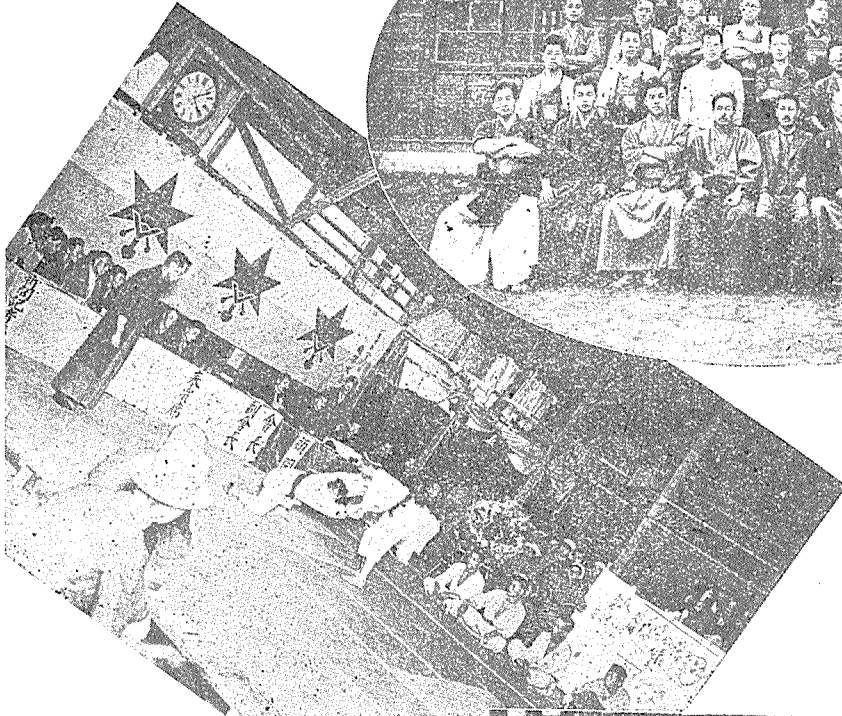


(上) — 大阪高商對本學專門部劍道試合記念撮影

道試合記念撮影

(左) — 福島學友會運動部主催武術大會(柔道の部)

術大會(柔道の部)



(上及左) — 天王寺國技館に於ける千里山學友會相撲部主催學生相撲大會

る千里山學友會相撲部主催學生相撲大會

生相撲大會





いて他國の言葉を研究しその國の文明を極めるのも、他國を經濟的、政治的に密接な關係を作つて行くのもよいが、それは前述のやうな氣運を來す一つの過程としてであつて欲しい。若しさうでないとするならば結局本末顛倒の誤を避け得ないであらう。』

### 校友彙報

#### 鴻鳴會總會

六月七日午後八時より天王寺廣田屋に於いて第七回總會開催、十一年度商經科出身數氏の入會申込を受け、幹事の事務報告終つて後宴を開く。雨天の爲め出席者は常より少なかつたが懷舊談に花を咲かせ一夕の歡をほし、まことに九時過ぎ散會した。出席者次の通りで尙當日記念の撮影をしたさうである。

糸島實太郎、三島律夫、巽鉄太郎、岡崎一雄、中村峯藏、山口藁夫、根谷武信、長久保昇、矢野國臣。(矢野幹事報)

#### 校友會大阪支部春季總會

恒例の校友會大阪支部春季總會は去る六月十日午後三時から有馬瑞寶寺公會堂に於いて開かれた。有馬にはかねて本學校友小松二男氏が有馬靈泉土地建物株式會社取締役支配人として旅館温泉等を經營してゐるので、此の度は特に同氏の御盡力によつて同會社直營の炭

酸温泉旅館が本會の爲めに解放せられる等の便宜を得た。早朝一番の列車で大阪を發し着後定刻まで有馬名所を見物に廻る一團もあつたりしたが、その後列車到着毎に人數を増し各自入浴や散策に打ち興じつ次第に會場に參集した。席定つて砂川支部長の挨拶、野村會計主任の會計報告あり、前記小松校友の紹介が濟んで直ちに宴に移つたが、有馬藝妓の手踊なき興を添えて歡談、快談頗る盛會であつた。因に當日の出席者は次の通りである。(次第不同)

稻葉正雄、岩崎卯一、石川敏雄、飯島善之助、橋本鹿藏、原田鹿太郎、濱田昌尾、花井壽造、西本政五郎、富永竹夫、大崎萬太郎、岡部庄次、桂忠雄、吉村種藏、吉田昔松、武田貞之助、垂水善太郎、竹井小野右門、瀧本貢、田川七郎、辰巳經世、田中英一、田中藤作、中村唯一郎、中村鄧次郎、中村秀光、内藤正剛、中務平吉、室石堂秀、野島勝次郎、野村吉藏、野口政次郎、黒田莊次郎、山口房五郎、八木孝三、安岡伸徳、山本彌一郎、松崎義盛、松本櫻四郎、小泉幸治、兒玉善吉、後藤田徳太郎、近藤友房、江草次郎、秋山卓爾、喜多村桂一郎、菊池金次郎、木戸卯之助、清成五六郎、木下孫一、湯原慶太郎、宮島綱男、三野莞爾、三島律夫、島田菊次郎、篠田栗夫、白川朋吉、清水新造、平井繁男、平尾縫太郎、春内操吉、目代誠吉、森川太郎、關豐馬、砂川雄峻、小松二男、小倉重太郎、木下徳一郎。

#### 三九會春季例會

明治三十九年度卒業生よりなる三九會春季例會は去る六月二十二日午後三時から六甲山麓甲陽公園内甲陽旅館に於いて開かれた。定刻本年度當番幹事の選舉を行つて、

谷田諸十郎、中村虎次郎、野村吉藏、古田

吉五郎、兒玉善吉、行森啓三郎、平尾藤平の諸氏當選し、一同宴に移つたがたまたま美妓の酒間を斡旋するあり歡を盡して散會した當日の出席者次の通りである。(次第不同)

岩本政市、別役金之助、布井良太郎、谷田諸十郎、堤新吉、野村吉藏、眞珠清彦、吉田吉五郎、兒玉善吉、行森啓三郎、水野醇三

#### 甲子會成立

本年度卒業生の中に卒業後お互の親睦を圖るを目的として甲子會が成立し、過般福島學舎に於いて發會式を挙げ、吉村富太郎、田邊芳市、在里三芳、淺野樹雄、杉本義太郎諸氏幹事として諸務を司つてゐるが、今同會の規約を示す次の通りである。

#### 關西大學甲子會會則

- 第一條 本會は關西大學甲子會と稱して事務所を大阪府東成郡中本町字中道四二七番地に置く
- 第二條 本會は大正十三年三月關西大學卒業生を以て組織す
- 第三條 本會は會員相互の親睦並に向上發展を圖るを以て目的とす
- 第四條 本會は春秋二季に定時總會を開き必要なる場合は臨時總會を開く
- 第五條 本會に幹事五名を置き總會に於いて選舉す任期は一ヶ年とす、但し再選を妨げず
- 第六條 幹事は本會を代表し會務を處理す
- 第七條 會員は維持費として毎年金貳圓を離出すものとする
- 第八條 會則の改正は總會に於て出席會員の過半數を以て之を議決す、可否同數なる場合は議長之を決す 以上

#### 西村校友よりの來信

前號所報、會計學研究の爲め渡米した西村勝太郎氏(大正九年經濟科出身)はその後引續き本學宮島理事に第二、第三信を寄越したが、それによる同氏は最初の豫定を多少變更し、途中シカゴ大學を訪ふたまま、ニューヨークに直行し、目下は各學校が夏季休暇である爲め、市から數十哩離れた片田舎で専心語學を傳習しつつあるさうである。因に同氏目下のアドレスは次のところである。

Mr. K. Nishinura  
c/o T. H. Evans, M. P.  
350 S. main street,  
Freeport, New York, U.S.A.

#### 校友動靜

西川正雄氏(大正三法) 今回八千代生命保險株式會社に入社京都支店に勤務中。  
島田繁太郎氏(推) 過去二十七年間府立市岡高等女學校校長として令名あつたが、今回都合に依り退職した。  
米田信太郎氏(大正三商) 今回社命を帯びて日本棉花株式會社スーラバヤ支店に出向した。  
大隅末廣氏(同一二法) 今回宮崎縣都城市都城公論社に入社し同社編輯部長に就任した。  
治 常德氏(同七法) 今回大阪府四條噺警察分署長に轉任した。

#### 校友住所移動

根川貞次郎(大正二商) 東區南久寶寺町四丁目三七ノ乙  
林 經夫(明四四法) 神戸市下山手通一丁目四四ノ三  
西山正雄(大正三法) 京都市上京區吉田町中之宮五  
廣實郁雄(同) 豐田正吉方  
大橋惣太郎方



大石 良孝(明三四法) 東京市赤坂南町五ノ二七  
 大西 秀太(明三四法) 廣島市外横川小村林華出張所  
 加治 信一(天三商) 香川縣琴平町六一八  
 島田 繁太郎(推) 南區天王寺堂ヶ芝町九八  
 中永 美雄(天三商) 北區上福島北三丁目一一七湯淺方  
 大西 幾郎(同) 北區新川崎町大阪造幣局官舎九六番  
 山内 朝登(同三法) 西成郡神津町小島一一五  
 阪口 軍司(同三法) 神戸市須磨西代山下町一丁目八〇  
 中島 一郎(同) 兵庫縣川邊郡立花村塚口一七中島理太郎方  
 鎌田 政熊(同) 鹿兒島縣熊次郡北種子村安納五四  
 中川 重太郎(天九經) 東區和泉町二丁目二六和歌山縣新宮町  
 堀田 馨一(明四三法) 兵庫縣加古郡水丘村溝口  
 岡野 重三郎(同四五法) 北區堂島濱通二丁目二〇双益商會内  
 岸本 忠雄(天二商) 北區堂島濱通二丁目二〇双益商會内  
 米田 信太郎(天三商) S. Yoneda & Co. Japan Cotton Trading Co., Ltd., 23 Tepekong Soerabaya Java.  
 塩飽 穂逸(明四二法) 新潟市鐵道省新潟運輸事務所  
 林 武志(天二法) 岡山縣和氣郡和氣驛前備作自動車株式會社  
 阿川 甲一(明三四法) 廣島市白鷗九軒町  
 治 常德(天七法) 北河内郡四條驛警察分署  
 野崎 愛次郎(明三法) 東京市外入新井町不入斗九八四  
 筋師 米次郎(天二法) 神戸市四番町一ノ一〇二  
 山口 榮次郎(同三商) 西成郡鷺洲町海老江二一一ノ二藤田彦太郎方  
 大隅 末廣(同二法) 宮崎縣都城西部城驛前都城  
 公論社  
 能仁 謙三郎(明三九法) 滿洲大連海關

德田 琢磨(天三經) 神戸市中山手通五ノ二六  
 藤 正勝(明三四法) 金澤市長町二番町一一  
 吉川 重慶(同四三法) 奈良縣北葛城郡箸尾登記所前  
 生島 又之助(天四商) 神戸市平野雲御所一七六ノ一金森彰三(同二商) 大連山縣通二丁目後藤商店内

**校友改姓名**

(舊) 齋藤 夫 林 經 夫  
 (新) 齋藤 夫 林 經 夫  
 明四四法 齋藤 夫 林 經 夫  
 大二三商 能川 外代治 土谷 外代治

**校友逝去**

大正十三年六月八日  
 大阪府東成郡生野村字林寺四番地  
 河田 逸 重氏  
 (天正八年法科卒業)  
 右訃音に接し謹んで弔意を表す

**謹告**

關西大學理事垂水善太郎氏ノ還曆及勤續三十七年記念會ニ關シ種種御高配ヲ仰ギ候處幸ヒ深甚ナル御同情ニ依リ續續御贊同ヲ忝ウシ締切期間ヲ過グルモ尙引續キ御申込有之候ニ付當分期間ヲ延期致シ多數ノ御贊同ヲ得テ同氏ノ功績表彰致度存候間御多用中恐縮ノ至リニ候ヘ共何卒特別ノ御垂情ニ依リ御高援賜リ度重ネテ奉懇願候 敬具  
 追テ第一回分御申込者芳名本月號千里山學報ヲ以テ御報告申上ダベキ豫定ノ處同誌紙面ハ都合上本號ニ於テハ一部ノミ掲載次號ニ於テ其後ノ分共一括御報告申上ダベク候  
 大正十三年七月  
 垂水氏還曆及勤續三十七年  
 記念會發起人一同

**學生彙報**

**ア式蹴球部東京遠征後報**

千里山ア式蹴球部が過般東京遠征を試み、連戦連勝の好成績を擧げてゐることは、前號所報の通りであるが、その後の戦況を略報すれば次の通りである。  
**對商科大學**  
 六月三日午後三時大家高等師範學校校庭に於いて野津氏レフェリーの下に對峙、本學先蹴で開始、三宅、播磨屢敵門を襲ふたが、敵亦好守して得點を許さず、結局双方無得點で引分さなる。  
**對早稻田大學**  
 六月四日午後四時青山師範校庭に於いて峰岸氏レフェリー、早大先蹴にて開始、敵は東都の豪、最初から物凄く攻め立て前半戦に於いて我軍二點を奪はる。後半戦に於いては我軍猛然奮起し、襲撃十數回に互り、苦戦の末同點を回復し遂に二對二にてタイムアップさなる。  
**對明治大學**  
 六月五日午後三時青山師範校庭にて、レフェリー、フェーゲン氏、明大先蹴にて開始、新進の荒手を前に廻して奮戦、後半戦に入りて我が軍總攻撃の擧に出でて敵をその陣に封じ、播磨のキック功を奏して得點四對二隅蹴八對二の成績にて我軍大勝す。  
 かく東都に於ける諸雄を屠つて關西軍の爲めに萬丈の氣を吐いた一行は、同日午後十時御成婚祝賀のバラックの都を後に法大、明大、

**對名古屋高等工業學校**

早大、アストラ、並びにフェーゲン氏等諸氏に見送られつつ名古屋に向つた。(久保生報)  
 六月六日午前八時半、名古屋着、八高、高工の學生諸君に迎へられ、木曾根旅館にて休息の後、午後四時より鶴舞公園グラウンドにて名古屋高工と松田氏審判の下に對戦、連日の疲勞に部員のコンディション甚だ悪しく、加ふるに試合前に暴風雨あり、全軍泥まみれになつて苦戦を重ねつつ、遂に最後の猛襲に敵を破り二對一のスコアにて名古屋劈頭の戦に凱歌を揚げた。  
 同夜大毎支局及名古屋高工の招宴を受け、エールを高唱して感謝の意を表した。

**對第八高等學校**

六月七日遠征掉尾のゲームとして中京の雄八高と同校校庭に於いて相見ゆ。午後一時井出氏レフェリーの下の開始、我が軍連勝の勢凄じく肉薄したが、敵もよく防ぎ全校太鼓入りの應援に氣勢を添えて挽回、漸く一點を先取したのみで後半戦に入る。我軍更に奮戦努めしも連日の戦ひに負傷者をさえ生じ、先づ一點を奪はれ、同點對戦のエキサイティングゲームさなつたが、長恨！更に一點を敵手に委して遂に遠征史上に一點の汚れを印す。  
 然し大阪を立つて以來旬日に餘り、連日奪戦を續けつつ、而も四勝三引分一敗さ云ふ遠征には前代未聞の好成績を収めた一行は、同日四時十分の特急で名古屋を發し、午後八時半宮島專務理事、水谷部長、服部教授その他多數の學生諸君に迎へられて梅田着、第一次の遠征を終へた。因にア式蹴球部遠征隊の一行は左の通りであつて、同部では今回の遠征に

ついで種種の便を與へられた大阪毎日、東京  
日日、名古屋支局に感謝の意を表してゐる。

(西島生報)

委員 角田好太郎 主將 梶浦太郎

部員 久保尙行、有井豊、三宅次郎、谷田  
薫雄、岩佐太郎二、永井昌彦、播磨員雄、  
寺田貞一郎、山縣不似麿、岡本通、杉本  
元次、北川格彌太、西嶋系三郎。

### 國際聯盟協會本學

#### 學生支部の新設

過般來國際聯盟協會學生支部を本學に設置せ  
んこの計劃が、かねて一部學生有志の間にあ  
つたが、愈その具體化を見るに至り、岩岸、  
戸田、中西、綾木、岡本、杉山、石川等の諸  
君發起の下に、千里山、福島兩學舎の學生合  
同で、去る六月十二日午後二時から、千里山  
學舎第九教室に於て發會式を舉行了した。

當日は本部から同會理事田川大吉郎氏、東北  
帝國大學教授法學博士松原一雄氏、同會幹事  
青木節一氏等も態出席せられ、本學教職員  
並に學生多數出席、定刻先づ發起人代表者岩  
岸巖君司會者となつて開會を宣し、次で學歌  
の合唱があり、岩崎本學教授の挨拶、戸田省  
三君の國際勞働局東京支局からの祝電朗讀に  
次ぎ、松原一雄博士は「秩序愛」なる題下に、  
國際聯盟の過去、現在及び將來に關して、又  
田川大吉郎氏は「その態度を公明に」なる題  
下に、國際聯盟に對する一般の誤解並にその  
眞意義に關して各一場の講演あり、役員を選  
任を終へ、岩岸君の閉會の辭を以て式を閉ぢ、  
直ちに學庭に於て記念撮影をなして午後四時

半盛會裡に散會した。  
因に同會の宣言及び綱領並に役員氏名は左の  
通りである。

#### 宣言

眼が高く理想の山嶺を仰げば仰ぐほど、手は  
低く足下の荆棘を刈らなければならぬ。偏狹  
なる國家主義は如何にそれが忌むべきもので  
あるにせよ、そは避けがたき現實の存在であ  
り、人種の將た民族の紛争は如何にそれが醜  
惡であるにせよ、そは抜きがたき傳統の餘弊  
である。

吾人は永久平和の一日も早く招來されんこ  
を望む。國際正義の搖ぎなき樹立は吾人が不  
斷の祈願である。この意味に於て國際聯盟の  
効果を、その程度まで期待し得るかは未知數  
であらう。然し少くもそはやがて來らんこ  
する黎明を指示してゐる。少くも足下の荆  
棘を拂ふことに努めてゐる。而してただそれ  
だけで充分ではあるまいか。それ以上何を期  
待することが出來やう。吾人はこれをもつこ  
吾人の理想に近づかしめるやう力を盡さなけ  
ればなるまい。

インタナショナル・スピリットの高調を以て、  
重大なる標語の一とする關西大學に學ぶ吾人  
が、ここに國際聯盟協會關西大學學生支部を  
設けた所以である。  
願はくば高遠なる理想を追求するこの唯一  
資格者たる同學諸君の賛同と協力あらんこ  
を。

大正十三年六月十二日

#### 國際聯盟協會關西大學學生支部

名稱 國際聯盟協會關西大學學生支部

目的 國際聯盟協會に協力し、國際的精神  
の涵養に力む。

事業 國際的諸問題の研究、討議、發表そ  
の他右目的達成に必要なあらゆる  
事業を行ふ。

組織 關西大學學生にして國際聯盟協會の  
趣旨に賛同し、當支部に入會せる者  
を部員とす。

役員 本支部に部長一名、評議員若干名及  
び委員若干名を置く。  
部長及び評議員は關西大學教授及び  
講師中よりこれを推し、委員は部員  
中より選任す。

部費 部員は年額金壹圓の部費を納入する  
ものとする。

事務所 事務所はこれを關西大學内に置く。  
因に役員は左の通りである。

支部長 教授 岩崎 卯一氏  
委員 岩岸巖君、西川留太郎君、戸田  
省三君、坪田吾一君、中西日吉君、牧山  
儀平君、藤井昂藏君、水島有年君(以上  
千里山の部)、石川鶴藏君、岡本勇君、村  
田重吉君、綾木茂太郎君、三宅萬吉君、  
杉山志敏君(以上福島の部)。

尚ほ評議員は本學教授講師諸氏を推薦し大部  
分諒解を得てゐるが、賀來講師、櫻井教授、  
飯田講師等は既に快諾せられた。

#### 關西大學社會問題研究會成立

今回本學千里山學舎學生峯浦重起(政三)、戸  
田省三(法二)、山崎峯雄(同)、上村靜馬(法  
一)、中西日吉(同)、伊藤新次(豫三)、徳久俊  
次(同)等發起の下に、一般社會問題の理論的  
研究を目的とする社會問題研究會なるものを

組織し、去月十七日午後二時から千里山學舎  
に於てその發會式を開催した。

定刻各科各級學生有志の参加するもの約五十  
名、戸田省三君司會の下に開會、同君は發起  
人を代表して、同會設立の趣旨その他に就き  
説明するところあり、次で會の綱領、事業等  
を議決し、更に委員の選出を終り、會員の五  
分開演説があつて午後三時半散會した。尚ほ  
當日は同會顧問たることを受諾せられた辰巳  
講師も出席一場の所感を述べるころがあり  
その後岩崎教授、山村講師も顧問たることを  
快諾せられた。

因に同會の綱領は主要の通りである。  
一、名稱 關西大學社會問題研究會。  
二、目的 一般社會問題の理論的研究をな  
すを目的とす。

三、組織 關西大學學生を以て組織す。  
會員の互選に依り委員若干名を  
選任す。

本會の趣旨に賛同せらるる本學  
教授講師を顧問に推し指導を仰  
ぐ。

四、事業 毎週少くも一回例會を開き右  
目的に應じ講演、討論會等に當  
つ。

五、事務所 事務所は關西大學内に置く。  
尚ほ委員は差當り前記發起人諸君の外に會員  
中より數名を選び加へることを志した。

#### 千里山野球部報

對大阪高商戰 去る六月二十日大阪高商對  
本學の野球戰は午後三時半から寢屋川球場に  
於いて中島(球三木)豊兩氏審判の下に本學  
先攻にて開始したが、結局十二對七で本學の

勝利に歸した。

超えて二十四日午後三時四十分から同寢屋川球場にて再び會戰、球審平野、壘審三木の下に開始したが十一對五で大阪高商が勝つた。同二十七日午後三時十分から三度大阪高商と寢屋川球場で戦つたが二十一A對五で本學大敗。

### 馬場・濱口兩選手引退記念兼 第四回中等學校學生相撲大會

本學相撲部年中行事の一である近畿學生相撲大會は、多年同部選手として學生相撲界に令名を走せた馬場紀夫、濱口光治郎兩君引退記念紳士並に大學及び專門學校學生相撲大會を兼ねて、去月二十二日午前八時半から、市内南區天王寺國技館内に於て開催せられた。定刻先づ中等學校第一回戰を以て開始、近く京阪神は勿論、遠く中國、四國方面からも出場、實に二十四校七十二選手を數へ、試合の度の重なるに共に次第に増して來る觀衆のよめき、熱狂せる應援團の激勵歡呼等は土俵の上に相撲つ肉の響みに漸次相撲氣分の濃厚さを増して行つた。

中等學校第二回戰が終るに、昨秋堺大濱に於て開催せられた全國學生相撲大會に個人優勝した本學竹田選手が土俵入りがあり、横綱を纏ふた雄姿が土俵に現れるに、この頃既に四邊のスタンドを埋めてゐた無数の觀衆の歡呼は暫しは場を動かすかの感を生じた。次で優勝旗の返還式があり、昨年優勝した神戸神港商業學校選手の手から、賀來本學相撲部長に返還を終り、紳士並に大學專門學校學生第一回戰に入り、これが済むに、司會賀來相撲部長

の挨拶があり、更に紳士並に大學專門學校第二回戰を経て、本學相撲部及び北濱紳士相撲會から、馬場、濱口兩選手へ記念品を贈呈し愈中等學校第三回戰に入つた。中等學校第三回戰後更に對校及び個人決勝戰を行ひ、學校としては御影師範學校が第一優勝校に、和歌山師範學校が第二優勝校となり、個人としては、天王寺商業學校松浦(一等)、成器商業學校吉田(二等)、和歌山商業學校濱口(三等)の順位で各賞に入つた。

紳士並に大學專門學校の部の第三回戰に於ては、第一回戰に於ける参加者約四十名中、残る者漸く十人、更に大倉洋紙店の石黒氏、本學の竹田君、多田商會の安岡氏、名古屋高商の稻垣君、大阪齒科醫專の阪本君の五人を残して第四回戰に入り、最後に竹田、安岡、阪本の三君が覇を争ひ、結局竹田(一等)、安岡(二等)、阪本(三等)の順で、竹田君再び全勝の名を博した。

次に三役の取組があり、本學竹田君は關西學院扇野君を、同じく濱口君は北濱紳士相撲會の林氏を、馬場君は清風會の濱地氏を、何れも相手を屠つて、小結、關脇、大關共本學側が全勝した。

最後に、紳士並に大學專門學生中の強剛を網羅した正五人抜あり、大阪藥專の中尾君、關西學院の大守君、大阪醫大の小林君、大阪齒科醫專の阪本君等屢敵を倒したが、未だ全部を抜き得ず、本學竹田君のみ始終敵を屠つて五人を抜き、これ亦全勝の榮冠を獨占するに至つた。

これを以て本大會を終り、優勝者にそれぞれ賞品を授與し終つたが、學生相撲會に於て前

例を破つたは勿論、國技館在つて以來の大盛況で、本學關係者中宮島事務理事、岩崎教授、水谷教授その他の教職員の顔も見え、校友糸島、貴志、福井、平手、栗田等本學相撲部の先輩諸氏も多數見えてゐた。

右大會終了後、新世界いろはに於て、本大會の慰勞宴を催したが、各大學及び專門學校からの出場選手、北濱紳士相撲會の有志、本學教職員、學生相撲部員等多數参加し、宮島本學學友會副會長の挨拶と共に開宴、盛會を極めて、十時頃閉會した。

### 千里山經濟學會例會

千里山經濟學會六月第一回例會は、同月十一日午後一時から千里山學舍研究室に於て開催せられ、十數名の會員の外同會顧問沖中、辰巳兩講師も出席し、松方幸次郎氏の通貨増發論に端を發して、金利の騰落と物價との關係を中心に約二時間に互つて研究討議を重ね、午後三時散會した。

尚ほ同月第二回例會を同月二十五日午後一時から千里山學舍研究室に於て開催、前回同様十數名の會員並に沖中顧問出席、法科二年牧山儀平君は『荻生徂徠の貨幣論に對する時代的解剖』なる題下に研究の結果を發表し、これに對する會員相互のディスカッションがあつて、午後三時散會した。

### 千里山洋書展覽會

鳥海青兒、森喬、猪口重男、森田捨次郎、岸本到、小泉潔、館秀雄の諸君が主となり六月二十七、八兩日に互り千里山第十四教室に於いて洋書の展覽會を開いた。前記諸君の作を始め集るもの百餘點、特に鳥海君出品の春陽

會に入選した作品二點は異彩を放つてゐた。

### フランス研究會發會式

既報、フランス研究會は去る六月二十一日市内清水町端の坊(會員吉田奎文氏宅)で發會式を兼ねてその第一回會合を催した。賀來、三田、徳尾の各講師を始め會員多數出席、會則その他につき打合せを了し、滿場一致を以て駐日フランス大使ポール・クローデル氏を名譽會長に推すことを決議し、尙左記の諸氏を名譽會員に推薦することを決して散會した。

- 明星商業學校校長 Albert Deber 氏
- 大阪外國語學校教師 Louis Marchand 氏
- 大阪株式取引所理事 上島益三郎氏
- 日佛協會神戸支部長 草鹿甲子太郎氏
- 在神佛國領事 E. Andre 氏
- 在日フランス商業會議所神戸支部長 J. Faverial 氏

### 英語會動靜

千里山英語會總會 去る六月六日午後零時半より第二十二教室に英語會會長岩崎教授の歸朝歡迎を兼ね、千里山英語會總會を開催した。法學部岩岸幹事の開會の辭、岩崎會長の萬國勞動會議に列席の經驗談、服部教授の挨拶、宮島事務理事の感想談、櫻井教授の激勵演説等ありて、新入會員を受け付け記念撮影の後散會した。

### 飯田講師の參會

福島英語會ではその後、時時會員相寄つて書取、會話等の練習をしてゐるが、去る七月四日夜の會合には本學校友であつて、過般ジュネヴで開かれた國際勞動會議に、資本家代表囑託して渡歐した飯田清藏氏も參會して、有益な一場の講話を試み、





月二十五日、武徳會兵庫支部主催の春季武道大會には淺野外雄、武藤滿、福井善隆、鈴木敏夫、木下五郎、黒田久の諸選手を出場せしめたが不戦一、引分一、四勝の好成績を得た。尙七月十日から約一週間の豫定で四國地方の遠征を企てるが詳細は又次號で報導する

### 第二回福島武道大會

去る六月二十二日午前九時から福島學舎道場及雨天體操場を打ち抜いて、恒例の第二回武道大會が開かれた。來り會する者近畿各大學、専門學校、市内各警察署の猛者連、柔道八十組、剣道百十組の多數の試合を午前から午後にかけて行ひ、火の出るやうな大試合も少くなかつた。柔道部の段外高點試合では、一等武藤(本學)、二等和久(齒専)、三等西川(本學)の成績で、五人抜きでは本行(二段、今宮警察)、今(二段、横山體育場)、倉永(三段、本學)の諸君が榮冠を得た。

試合終了後本學黒田三段、妹尾二段の投の形教師磯島四段本學倉永三段の極の形あり、劍道部では校友佐瀬四段の眞劍長谷川英心流居合及び山中四段の眞劍の形あり、頗る盛會であつた。

審判は柔道部 石田五段、磯島四段、助永四段、高橋四段、中西四段、劍道部 志賀教士、二川教師、堀口教師の諸氏で、來賓も多數參會し、閉會後は住吉亭で關係者一同を招じて慰勞の小宴を張り、綾木學友會幹事長、富田運動部長の挨拶等があつた。

### 關西大學乘馬會

かねて畫策中であつた本學乘馬會は、最近に至り師團、學校當局等との連絡なり會員の募集を行つたところ百名を超す應募者を見たが、定員の都合で約四十名を探り毎日曜日(師團の馬匹を借り受け將校の指導の下に練習を始めてゐる。目下役員及會員の氏名は左の通りであるが、同會では特に便宜を與へられた、第四師團司令部、輜重兵第四大隊の厚意、學校當局及び校友榎木氏の助力に對して特に感謝の意を表してゐる。賛助員 榎木浩巖(校友、辯護士)、綾木茂太郎(學友會幹事長)、富田英雄(同運動部長)、會長 淺野繁雄、副會長 山下與平、幹事 橋本利八、福島重雄、島山與市郎、森田正芳。



會員 安田耕、楠田寅三、林秀穂、吉松俊之助、加茂實、長尾長治、大西秀雄、北見種造、延藤喜秋、中西恆三、八田義直、濱名慶次郎、森川政藏、諏訪克巳、杉本宏治、豊島耕造、柏原實藏、山本洋平、安藤仁、木村彌策、杉村守清、原口貢、吉田龍一、島田三郎、花房節男、二見辰二、森吉太郎、山脇廣吉、荒井彌孫四郎、池田金八、菅井秀

治郎、宮川元之助、吉田明、大島守吉、松本長太郎、中山義輝、山室茂雄

### 豫自治會學生雄辯大會

本學専門部豫科學生に依り組織されてゐる專



(上)尉中永徳官教會同と(下)員會馬乘學大西關

豫自治會では、去月十四日午後六時から同會成立三周年記念學生雄辯大會を市内天王寺公會堂に於て開催した。聴衆堂に滿り頗る盛會であつたが、プログラムは左の通りである。

開會の辭(幹事高部和男君)、我等の覺悟(經豫前弘三君)、青年の使命(法豫岸田潤一君)、醒めよ(法豫左農靜夫君)、嗚呼野蠻なるかな米國(第二商業渡邊正人君)、日米戰爭の前に(經豫河野政平君)、現代、青年の覺悟(法豫久佳利三君)、現下

に於ける産業の危機(商豫田中菊次君)、帝國の使命と青年(法豫山下勝利君)、司會者挨拶(幹事長山室茂雄君)、若人は獨立獨歩を要す(商豫久保田幸次君)、目的と青年(經豫濱州長藏君)、嗚を靜めて向上の一路を(第二商業八木末治君)、排日問題に就いて(法豫川勝基助君)、プロレタリア階級のために靈魂は叫ぶ(文藝部長松井廣君)、閉會の辭(幹事山本誠一君)。

尚ほ専門部本科學生神戶鶴三、島田三郎、堀武藏、香西政一、松井慶次郎、杉山志敏、赤木元一等の諸君も出席各熱辯を振つた。

### 關大劇研究會第五回試演

本學専門部學生有志に依つて組織されてゐる關西大學劇研究會では、去月十六日午後六時から、その第五回試演會を、市内南區天王寺公會堂で開催したが、觀衆七百餘、アマチユアミしては實に立派なものである等の激賞もあり、盛會裡に午後十時半終了した。尚ほ右終了後新世界イロハ食堂に於て慰勞の小宴を張り、主宰吉松君の發聲の下に、關西大學の萬歳を三唱して散會した。因に試演番組は左の通りである。

- 第一 藤田草之助氏作、星を數へる人。
- 第二 グレゴリー夫人原作・近藤孝太郎氏譯 救民院病室。
- 第三 久米正雄氏作、地蔵經由來。

### 琴浦會文化講演會

阪神沿線尼崎市在住の學生からなる琴浦會では六月二十二日午後七時から同市圖書館樓上で第一回の文化講演會を開催した。折柄の雨天にも不拘來會者多數で、殊に小泉、岩崎兩教授の講演もあり頗る盛會であつた。當日の

プログラムは次の通りである。

プログラム

- 一、開會之辭 法科 秋山謙吉君
- 一、發會を祝す 經濟科 杉山志敏君
- 一、國難の歸趨 法科 小谷完二君
- 一、階級闘争の一考察 校友 天野平一氏
- 一、司會者挨拶を兼ねて女性解放の是非 經濟科 森永清晃君
- 一、我が國民思想の過去、現在、將來 教授 小泉幸治氏
- 一、本邦信用組合の趨勢 校友 中江 濟氏
- 一、愛國心の一考察 教授 岩崎卯一氏
- 一、閉會之辭 文科 奥野周一氏

千里山學内雄辯大會

去月二十四日午後一時から千里山學舎第九教室に於て、第二回學内雄辯大會を開催した。多數學生の來聴があつた外、服部教授、武田、辰巳兩講師の出席もあり盛會裡に開會、左記の通り各學生がそれぞれ雄辯を振つた外、武田講師の所感、服部教授の講演等もあり午後五時三十分閉會した。

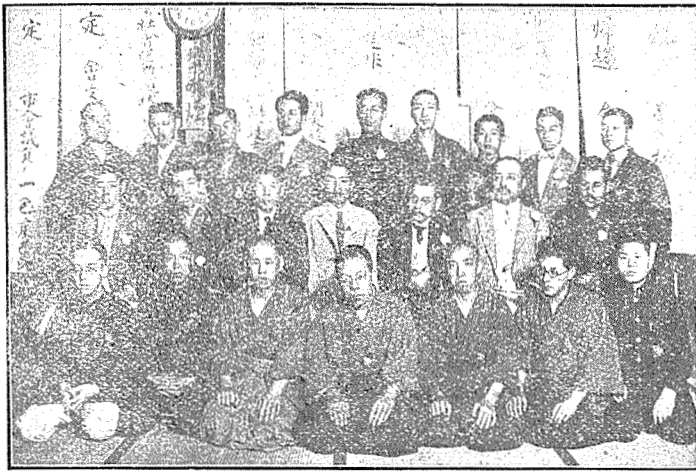
プログラム

- 開會之辭 豫一 中尾長洋君
- 斷あるのみ 豫一 杉野康五郎君
- 御成婚奉祝に於ける私感 豫三 徳久俊次君
- 行進曲を聞け 豫一 太田 收君
- 刻下の急務 豫一 辰巳孝次君
- 勞働者よ！ 政三 吉田奎文君
- 社會主義運動 政三 清水政重君
- 曉鐘か晚鐘か 政三 平尾省造君
- 生くべき者生くべからざる者 法二 武良 操君
- 民法第七百九條を中心として 豫三 伊藤新治君
- 小生の戀愛に對する一見

現代法制に對する卓見 法三 山崎敬義君  
 日本刀の隆に潜みて 法三 井谷孝平君  
 軍備は縮少すべきか 法三 繁森 明君  
 婦人問題に就て 教授 服部嘉香氏  
 閉會之辭

千里山香川縣人會成立

同鄉的色彩の中に在つて、相互の親和と向上  
 尼崎圖書館に於ける琴浦會文化講演會記念撮影



を計るために、千里山學舎に學ぶ香川縣出身學生諸君に依つて今回千里山關西大學香川縣人會なるものを組織し過般その發會式を擧げた。因に綱領の概要は左の通りである。

- 一、會名 千里山關西大學香川縣人會。

一、目的 會員相互の親和を計り共同一致事業に當るを以て目的とす。

一、事務所 關西大學千里山學舎内に置く。

一、組織 關西大學千里山學舎に學ぶ香川縣出身者を以て會員とす。

一、役員 一、顧問一名。二、賛助員若干名。三、會長一名。四、副會長一名。五、幹事若干名

顧問並に賛助員は本會の目的を贊助する會員外の同縣人。會長、副會長及び幹事は會員の互選とし、役員任期は各一年とす。

一、事業 夏期遊説、春期遊説その他本會の目的を達成するに必要なる事業。

一、會費 毎月金五拾錢。

尚ほ既に決定した同會役員は左の通りである  
 顧問 關西大學理事白川朋吉氏、會長 徳竹要君、副會長 神保敏夫君、幹事 三宅修太郎君、丹羽英夫君、清水正秀君、數下益治君。

親士會夏期總會

去る七月三日親士會では千里山學舎に於いて夏期總會を開いた。出席十數名、夏期休暇中の事業について種種打合せを爲すところありレフレッシュメントをこりつつ懇談をつくして散會した。

千里山短歌會一周年記念歌會

千里山短歌會では去る六月二十日午後一時から千里山學舎で一周年記念歌會を催した。歌會の回を重ねる度毎に充實さを増して來たが此度始めて高田さき子夫人の出題『水』によつて即詠をし、多くの佳作を得た同會では誇つてゐる。尚ほ當日の詠草次の如し。

苗代田に群れる鴨の音もなく羽攫ける朝涼風

吹くも。 江里口三秋

語るだに人なき部屋の徒然にアルバム披き獨り微笑む。 谷口白羊

吾が魂は庭の若葉にこけ入りてかるき心のこのあさげかな。 石田志茂子

追はららし跛の犬の軒下に隠れたるを春の雨降る 辰巳孝次

努力てふ言葉のもてる慰めにさみしく暗き道あゆむわれ。 北村兼子

淋しさに朱を調色板にしぼり出し布一面にぬりたくりたり。 島海青兒

釣人の竿を肩にして菜畑の小道を通りて土手に出たり。 水嶋有年

なやましき心抱きて野路を行けば落陽流れぬ山羊なく丘に。 森哇孝夫

あひみれどこの思ひをば告げも得ずたゞうつむきて別れるかも。 寺田淳子

早や行きし春の名残を求めつつ孤りの月は空に迷へり。 東清一

川面をうつこの雨のはげしくば船頭小唄やこされ聞へく。 平尾省道

新らしき光に満つるバラツクの窓よりもる、讚美歌の聲。(東京新見) 西嶋系三郎

旅日記筆さる宿の夜のしづま祭太鼓のものうく聞へ來。 加藤金次郎

青梅をかじる兒の瞳に送られて村ゆくわれも遠雷を聞く。 牧山儀平

室のちの白き壁面に若き蠅畫をぬくげにはへるよ一つ。 鎌田春美

この頃は夢の秋かよ田舎道あゆむ吾身に汗を思はゆ。 坪田吾一

山路のむらがり生ふる藪の中ひつゝとして青蛙さぶ。 高田さき子

ほろびたる故國を去りてトロを押す朝鮮男の髯ふかき顔。 高原草路

(第二十四頁に續く)

世のつごめ人の營み今更に知りては欲つず黄金し  
ろがれ。

早川 講師

入ツ手葉にこまれる蛙ふりそぐ雨の最中にまた  
くさもせず。

櫻井 教授

疲れてはつづれのなかにすぎはひを忘れて眠るわ  
れのいこさ。

村上 教授

天平のみほとけよろこ相好の微笑まんとして止め  
たまひたる。(奈良博物館にて)

吉田 奎文

ここにふれ話すてふりにかくし得じ若きはいまや  
うれ落つるかな。

上木 樂羊

夕霧に消ゆゆく人の姿をば君に似たりと思ふはか  
なさ。

眞木 新

をざりぬる男と女いつしんにもを忘れてをざり  
ぬるなり。(奉祝踊)

服部 教授

以下即詠 出題 『水』

おとなしく遊べる子等のさま見れば水いたづらに  
まじり居りけり。

坪田 吾一

よごみなく清く流るゝ谷川の水の姿を心こもせむ

石田 志茂子

野に出でば蛙つるなど水草を取り行く兒あり初夏  
とはなりぬ。

辰巳 孝治

花さつき洋服姿の子供等が水やりに来つたべこな  
れば。

あでやかにキャシャに眞白き波をもて水草洗ふあ  
かつきの風。

加藤 金次郎

ゆくりなく宿りし家の井戸の水とみどく飲みぬさ  
すらひのわれ。

東 清一

若ければ十七なれば流れゆく水の音さへ悲しまる  
かな。

北村 兼子

淋しさに一人わが家を立ち出でて今日もみつめぬ  
水色の空。

賞讀と罵詈の花咲く兩岸を水棹さしてぞゆるく漕  
ぎこむ。

馬淵 弘

思ひ切つて加茂の水はよいですれと初めての女に  
云ひ放ちけり。

初夏と云ふに水に溺れし男がある去年もあがれり  
來年もあがらむ。

水嶋 有年

少女等の水色袂も軽くして床几に涼む夏祭の夕。

ひた／＼と足をぬらしてよるこぶや吾が子よ朝の  
海はよろし。

早潮に流るゝ海月むらがれりわが行く嶋は日の前  
にあり。

草しげる浅き水田は陽にすみてうつれる空の影し  
つかなり。

新に勸選議員に任せられた本學理事  
佐竹三吾博士 前醫學部書記(兼參照)

日にいる若葉は萌てて山近き泉のはこり初蟬の  
なく。

高原 草路

遠方に母校の屋根のほのみゆる大淀川原水鳥のこ  
ぶ。

夜ぶりの火水にうつらふ小田川の橋のたもとにわ  
れ一人をり。

尾上 淑雄

鳥坊は水が下手だ云はれたが今日は描いたぞこ  
の色この遊さ。(私を可愛がつて下すつた大毎記  
者園部氏に)

心あらばわがこまづけ加茂のみつ難波の里に送  
りまげよ。

南無三寶キツトの靴に打ち水をまきかけられて土

高田 とき子

ぼこり吸ふ。

溜池に浮ぶ水面の水草に思ひちらせり蜻蛉さまり  
て。

廣告塔明滅なせる初夏の道頓堀の水はよろしや。  
(Xに送る)

今にして想へげ遠く南國の水に育ちし心よき君。

大阪朝日新聞社樓上に於ける  
文學科開講記念文藝講演會

吉田 奎文

公園に人なきを行けば噴水のしぶきとミミにたそ  
がれぬるも。

水かさの尺をまじけん夜ふかきにぞわめく人を汽  
車に見つゝ行く。

服部 教授

文學科開講記念文藝講演會

本學専門部文學科開講を記念すべき企ての一  
として、本月三日午後六時から、同科主催の  
文藝講演會を、大阪朝日新聞社後援の下に市  
内中之島同社樓上の講堂に於て開催した。定  
刻男女多数の來聴者に依り満場立錫の餘地な  
きまでの盛會裡に開會左記の通りの講演があ  
つた。

プログラム

熱血詩人バイオンを慕ひて 學生 藤本幸一君

小劇場運動に就て 同 下野英三郎君

文學の夢と現實 教授 服部嘉香氏

文學科開講に對する歐米諸  
大學よりの祝電視文披露

大劇場の經營と民衆藝術との關係  
阪急電鐵事務取締役 小林一三氏

サンデイカリズムに現れたる  
ベルグソンの哲學 教授 岩崎卯一氏

大學に於ける文學教育の意義  
事務理事 宮島綱男氏

當日は右プログラムの示す通り、學外から阪  
神急行電氣鐵道株式會社事務取締役として、  
交通事業界に於て令名あるのみでなく、巖に  
寶塚に少女歌劇を創設し、更に今回同所に大  
劇場を新築する等、民衆藝術の方面にも常に  
新機軸を出しつつある小林一三氏の講演もあ  
つて、一層該講演會をして意義あらしめるも  
のがあつた。尚ほ最後に何時もながらの大阪  
朝日新聞社の御好意を深謝する次第である。

眞木 新

ぼこり吸ふ。

溜池に浮ぶ水面の水草に思ひちらせり蜻蛉さまり  
て。

廣告塔明滅なせる初夏の道頓堀の水はよろしや。  
(Xに送る)

今にして想へげ遠く南國の水に育ちし心よき君。

大阪朝日新聞社樓上に於ける  
文學科開講記念文藝講演會

吉田 奎文

公園に人なきを行けば噴水のしぶきとミミにたそ  
がれぬるも。

水かさの尺をまじけん夜ふかきにぞわめく人を汽  
車に見つゝ行く。

服部 教授

文學科開講記念文藝講演會

本學専門部文學科開講を記念すべき企ての一  
として、本月三日午後六時から、同科主催の  
文藝講演會を、大阪朝日新聞社後援の下に市  
内中之島同社樓上の講堂に於て開催した。定  
刻男女多数の來聴者に依り満場立錫の餘地な  
きまでの盛會裡に開會左記の通りの講演があ  
つた。

プログラム

熱血詩人バイオンを慕ひて 學生 藤本幸一君

小劇場運動に就て 同 下野英三郎君

文學の夢と現實 教授 服部嘉香氏

文學科開講に對する歐米諸  
大學よりの祝電視文披露

大劇場の經營と民衆藝術との關係  
阪急電鐵事務取締役 小林一三氏

サンデイカリズムに現れたる  
ベルグソンの哲學 教授 岩崎卯一氏

大學に於ける文學教育の意義  
事務理事 宮島綱男氏

當日は右プログラムの示す通り、學外から阪  
神急行電氣鐵道株式會社事務取締役として、  
交通事業界に於て令名あるのみでなく、巖に  
寶塚に少女歌劇を創設し、更に今回同所に大  
劇場を新築する等、民衆藝術の方面にも常に  
新機軸を出しつつある小林一三氏の講演もあ  
つて、一層該講演會をして意義あらしめるも  
のがあつた。尚ほ最後に何時もながらの大阪  
朝日新聞社の御好意を深謝する次第である。

眞木 新

皇太子殿下御成婚記念文庫資金 寄附申込者芳名

- 六 一口金五圓 (申込順)
- 大立目重虎氏
- 山口村 喬氏
- 武田貞之助氏
- 和田義 爲氏
- 西垣彦次郎氏
- 宮本英 雄氏
- 武田宣 英氏
- 小西儀 助氏
- 川崎齋一郎氏
- 永阪不二子氏
- 菅沼豊次郎氏
- 八田兵次郎氏
- 小倉正 恒氏
- 増山忠 次氏
- 吉崎龜之助氏
- 林 龍太郎氏
- 柿崎 欽吾氏
- 山下彌一郎氏
- 澁川忠二郎氏
- 後藤武 夫氏
- 黒田莊次郎氏
- 中田錦 吉氏
- 角田好太郎氏
- 湯川 寛 吉氏
- 丸善株式會社大阪支店
- 尾崎清太郎氏
- 木戸卯之助氏
- 木村 清氏
- 川瀬光 吉氏

四 口 三 田 直 吉氏  
 正誤——本誌第十七號本報記事露口柳太郎氏、第二十號同高橋松一郎氏とあるは高柳松一郎氏の、何れも誤につき訂正する。

謹告

皇太子殿下御成婚記念文庫設定に關し、幸ひにも江湖各位から多大の御賛同御芳配を忝うし、展報の通り豫想以上の好成績を収めることが出来ました。ここに先づ御依頼を打ち切り致しますに當り謹んで深謝致します。

尚ほ従來の御報告記事中、掲載洩れ又は口數若くは芳名の誤載がありましたら御手数ながら御一報願ひたいと存じます。  
 大正十三年七月

關西大學

關西大學校友 各位  
 その他關係者

雜錄

ウィンナに於ける國際

夏期學校

ウィンナに於ては一昨年即ち一九二二年來、國際夏期學校 (International Summer School) なるものを毎年開催してゐるが、第一回には約六百の學生が集り、英領の大學教授が講師となり、第二回即ち昨年度は二千餘の學生を集め、講師は獨、チェコスラヴァキア、ハンガ

リー、ユーゴスラヴァキア、イタリー、ス井ス等の大學教授であつた。本年はその第三回目を開催する譯であつて、講師にはデンマルク、オランダを初めとし、一層注意を惹くことは佛、獨二國の大學教授も講師として参加することである。是によつて是を觀るに、この國際夏期學校の教授は、殆どヨーロッパの各國から出てゐる譯で、尚ほ注意すべきは同校の講師中に文學を講ずる支那人の名のあることである。ただ日本の教授の名前のないことは遺憾であるが、追ては参加するやうに努力し、以て眞の國際學校たらしめたいものである。

政治、經濟上のナショナリズムは今日隨分各國で高唱せられ、現に過般の大戦にはこのナショナリズムが随分役に立つたが、然し教育に於てはインタナショナリズムに依らなければならぬことは今更言ふまでもないことである。本學が各國語の夏期講習會を開催するのも事小なるが如し雖も、前述の意味に於てであつて、これが所謂國際平和に資することと少くないであらうことは疑を容れぬところであると思ふ。

關西大學學外講演に就て

ユニヴァシティー・エキステンションの一方方法として例年の通り本夏期休暇中も、地方の各種團體の招聘に應じ、本學教授諸師を煩して學外講演會を開催することに就ては本號學内報に於ても、一部報道した通りであるが、既にこれを承諾せられた諸氏の題目竝に氏名は左の通りである。

正誤

大學教育、一般經濟學、 内外經濟事情、農村問題、 統計學、人口問題等	教授	宮島綱男氏
一般歷史學、婦人問題等	教授	小泉幸治氏
社會學、社會政策、人種問題、 思想問題、勞働立法法等	教授	岩崎卯一氏
近松の藝術と時代の背景 萬葉集に表れたる日本國民性、 國語意識の頽廢と國語政策、 藝術の起源に關する諸學說、 科學の破産から驚異の復活へ	教授	服部嘉香氏
排日問題とキリスト教、 その他宗教學、倫理學	教授	櫻井 匡氏
日本の文化關係、獨逸文化の特徴、 國際聯盟前途	講師	新町徳之氏
尚ほ右の外左記諸氏も各その専門に従ひ事情の許す限り出講せられる筈である。		
哲學	教授	中村鄧次郎氏
英文學	同	村上喜貞氏
經濟學	講師	沖中恒幸氏
哲學	同	武内省三氏
法律學	同	武田藏之助氏
法律學	同	入江眞太郎氏
法律學	同	木下孫一氏

本誌前號第二十頁、懸賞論文發表に關する記事申選外佳作者「專門部法律學科第三學年山崎敬義」にあるは「法學部法律學科第三學年山崎敬義」の、同じくその論題「遺約金契約ノ効力ヲ論ス」にあるは「違約金契約ノ効力ヲ論ス」の何れも誤につきここに訂正する。





### 關西大學校友ソノ他關係者各位へ

●千里山學報維持費トシテ、校友ソノ他關係者各位カラ續續多額ノ御出捐ニ預リ有難ク幾重ニモ御禮申上ゲマス。

●何時モ申上ゲテキマス通り、出來ルナラハ毎號無料デ御配付申上ゲルノガ本意デアリマスガ、今ノトコロドウシテモ各位ノ御援助ニ俟タナケレバ、到底發行ヲ續ケテ行クコトノ出來ヌ状態ニアリマスノデ、遺憾ナガラ不遠慮ニト言フヨリモ寧ロ進ンデ御寄捐ヲ仰イデキル次第、何卒惡シカラズ御諒恕ヲ願ヒマス。

●金額ハ各位ノ御志ニ委セル外ゴザイマセンガ、大體年額貳圓位御寄捐願ヘマスレバ收支相償フ旨申添ヘテ置キマス。

●從來御出捐願ヘナカツタ方ニ、コノ際何分ノ御援助ヲ御願ヒ申シ上ゲマス。ソシテ新タニ御出捐下サル方ハ、御手數デスガ左ノ申込書ヲ御切り取り下サツテ、金額ナリ拂込方法ナリ適宜御書入ノ上御送付願ヒマス。

●尚ホ、一年以上繼續御送申上ゲテ弗ル方デ、今尚ホ御出捐ガナク、且ツ維持費ニ付テ何等ノ御通報ニモ接シナイ方ハ、或ハ送付先ニ現住サレナイノデハナイカト存ジマスカラ、今後發送ヲ見合セルコトニ致シマス。

大正十三年七月

關西大學學報局

### 千里山學報維持費拂込申込書

住所

年度 科 名 貴

金額

一金

拂込方法

振替貯金又ハ郵便爲替

集 金 郵 便

(何れか一方を抹消して下さい)

(第九頁より續く)

五、Berniagustino) イタリアト院議員

でバルマ大學(Univ. di Parma)の刑法及刑事訴訟法講座の正教授である。同大學の元老教授で、今年六十五歳の老人であるが社會主義者である。フェリ教授と親交があり、且つ同じく實證主義の刑法を講じて居る人である。同教授には、刑法に關する著書四種、刑訴に關する著書一種で、専門以外の著述は殆どない。著書目録は後に掲げる。

六、Ferrero (Guglielmo) 故オムブソー

教授の愛婚の一人である。同氏の夫人は亡父オムブソー教授の遺志を繼承し、今尙刑事人類學の研究に従事し男子に劣らぬ専門の著述が多い。フェレロ氏は「ローマ興亡史」(Grandezza e decadenza di Roma, Milano, Treves) 五卷の著述によつて一躍イタリア一流の歴史學者の一人と認識されるに到つた。一九一〇年には「オムブソー教授の面影」(In memoria di Ces. Lombroso, Milano Treves, p. 112.)を發表し、一九二三年にはオムブソー教授と共著で前に發表した『犯罪婦人。通常婦人ニ賣笑婦』(La donna delinquente, la prostituta e la donna normale)の大著を改訂して出版された。

若い頃は象徴主義(Simbolisme)の主張者で、これに關する二冊の著書がある。(1) "Simboli in rapporto alla storia e filosofia del diritto, alla psicologia e alla sociologia." Torino, Bocca,

1893, p. xiii-137.

(2) "Les lois psychologiques du symbolisme." Pinolo, 1895, p. x-251. シゲレ教授と共著のイタリア刑法研究があるが、これ等は總て、青年時代の著作で、近年は歴史家となり濟ましてゐられるやうだ。

Caratogue making もこの程度で止め、早くコセンチニ教授との會見記を打切る可く候。

### 八月號休刊

例年の通り本誌八月號は休刊し第二十二號は九月十五日發行致します

大正十三年七月十二日印刷  
大正十三年七月十五日發行

### 不許複製

編輯兼發行人 辰 巳 經 世  
大阪府北區上福島北二丁目  
關西大學學報局  
印刷者 飯田彌之助  
大阪府西區土佐堀通四丁目五番地  
印刷所 會社 三 有 社  
大阪府北區上福島北二丁目  
發行所 關西大學學報局

舊學舎 關西大學  
電話土佐堀(一〇四九) 五五七〇  
大阪府北區福島  
新學舎 關西大學  
電話土佐堀(一〇四九) 五五七〇  
大阪府外千里山

大學豫科

募集人員 三十名  
出願期日 八月二十五日ヨリ九月五日マデ  
入學試験 九月八日ヨリ十日マデ

關西大學學生缺補募集

專門部

募集人員 本科(法・商・經・文)豫科各若干名  
出願期日 八月二十五日ヨリ九月五日マデ  
入學試験 九月八日(本科)同九日(豫科)

この會照へ記下入封料信返は細詳

舍學島福學大西關島福區北市阪大

關西大學 第二回夏季 會員募集

- 講習學科 英語・佛語・獨語科
- 會期 七月二十一日ヨリ八月十二日マデ
- 會場 關西大學福島學舍
- 講師 關西大學教授並ニ講師
- 特權 各部高等科修了者ハ關西大學專門部入學試験語學免除
- 照會 詳細ハ大阪市北區福島關西大學福島學舍へ照會ノコト

關西大學 關西甲種商業 指定洋服商  
關大第二商業

長谷屋號

大阪市上本町六丁目  
電話 南 四五一二番  
振替 大阪 五五三八番

●今宮支店 ●釣鐘町支店

關西大學 關西甲種商業 指定

難波洋服店

西區京町堀上  
電話 土佐堀 二六三五番

關西大學 關西甲種商業 給品部用達

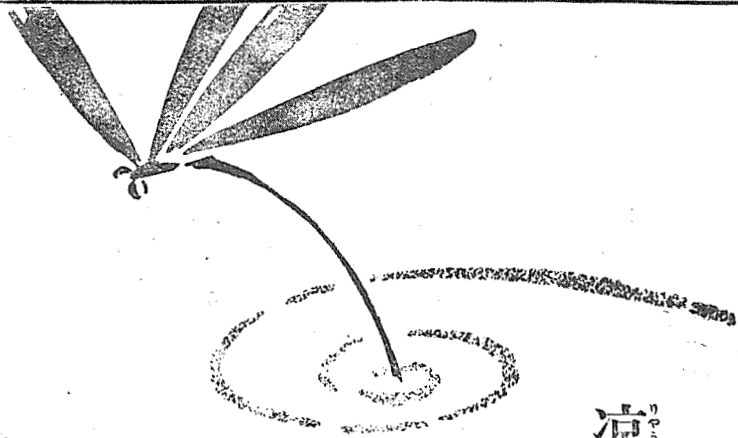
恒川商店

夕オ儿 風呂敷卸問屋  
手拭  
大阪市北區出入橋西詰  
電話 土佐堀 二四四三番

關西大學 關西甲種商業 指定

野島書店

明文堂  
大阪市北區上福島北三丁目  
電話 土佐堀 一二八六番  
振替 大阪 三九九九一番  
本學校友 野島藤次郎



涼風冷氣塵内に満つ

水の都の名に背きて、熾きつく陽光に燃わ立つ満都の藁の中にも、一きは廣くて高い當店は、東に連る山あひから湧き出る涼風、西の海上を渡り來る冷氣を

一ばいに受け入れつ、諸設備と相俟つて店内は無限の涼味を湛わてをります。屋上のソーダファウンテンに心頭を潤すも亦快い銷夏の一つで御座いませう。

越三の月八

更に店内のそこには、海へ、山へ——旅の心を満たすべき軽快な御用品を初め、眼に觸る、もの皆清々しき眞夏の御用品に満ち満ちてをります。何卒盛りの暑さをこゝに避けて御清遊の程偏に御待ち申上げます。



大 阪

三越呉服店